CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
Provided by Kanazawa University Repository for Academic Resources

漢語指示代名詞の歴史的変遷 ——

現代方言と文献からのアプローチ

陳　　怡　君

平成 27 年 3 月

博士論文

漢語指示代名詞の歴史的変遷　――

現代方言と文献からのアプローチ

金沢大学大学院人間社会環境研究科

人間社会環境学　専攻

学　籍　番　号　　1121072712

氏　　名　　陳　　怡　君

指導主任教員名　　岩田　　礼

目次

目次 1
第一章　研究の動機、目的及びアプローチ 3
1.　研究動機及び目的 3
2.　指示代名詞の歴史変化に関する問題点 6
3.　本論文の構成 9
第二章　古代文献における指示代名詞 11
1.　文献上の指示代名詞 11
1.1　先行研究 11
1.2　使用テキスト 12
2.　上古文献における指示代名詞の考察 13
2.1　上古文献の選択について 13
2.2　上古文献の考察結果 14
2.3　上古文献における「之」及び「其」 16
3.　中古文献における指示代名詞の考察 26
3.1　世説新語 27
3.2　仏教経典四冊の考察 35
3.3　中古文献考察のまとめ 42
4.　中古から近代へ——敦煌変文の考察 43
5.　第二章のまとめ 46
第三章　指示代名詞の地理的分布と歴史的変遷 50
1.　指示代名詞の形式と地理的分布の特徴 50
1.1　指示代名詞の形式と類型化 50
1.2　地理的分布の特徴 51
1.3　地理的分布の解釈 58
1.4　指示代名詞の類型地図——文献資料との対照を兼ねて 59
2.　南方方言における指示代名詞の変化の要因 69
2.1　古形式の保存——「TS－K」及び「T－K」 70
2.2　定（definite）を表す「指示詞＋数詞＋量詞＋名詞」構文の文法化 70
2.2.1　南方方言の「定」を表す指示詞、数詞、量詞 71
2.2.2　「定」の表示法：南方方言と北方方言の指示類型 73
2.2.3　文法化後の指示代名詞の変化 74
2.3　同音衝突の影響 76
2.4　方言接触の影響 77

3.　第三章のまとめ 78
第四章　結章 79
1.　各章の要約 79
2.　結論 83
参考文献一覧 84
〈引用文献〉 85
〈第二章で使用した文献のテキスト及び注釈書〉 87
〈第三章　表 7、表 8 で使用した方言資料〉 88
〈第三章　表 10 で使用した方言資料〉 88
〈主要参考方言資料〉（上記以外） 89
語形一覧 91

第一章　研究の動機、目的及びアプローチ

1.　研究動機及び目的

本論文は、漢語の指示代名詞の歴史的変化の様相を明らかにすることを目的とする。

指示代名詞は事物、場所、方角などを指し示すのに用いられる基礎語彙である。指示代名詞は人の主観にかかわる空間感覚を表すため、認知論、語用論の対象とされることが多い。しかし、指示代名詞は文脈或いは会話現場の情報に依存性が高いため、文献に現れる指示代名詞の意味を正確に捉えることは容易ではない。また、方言における用法についても同様のことがいえる。

漢語の指示代名詞を最初に研究した馬建忠（1898）は、指示代名詞と指示詞を区別し、前者を「指名代字（指前文者)」、後者を「指示代字」と呼んでいる。「指名代字（指前文者)」とは、「之、其、是、斯、此」など承前機能を持ち、名詞と見なされるものであり、「指示代字」とは、「夫、此、是、若、彼」など名詞を修飾するものである。馬建忠の文法研究は古典語を素材としており、「指名代字」即ち指示代名詞と「指示代字」即ち指示詞の区別には一定の根拠がある。例えば、遠近関係の表示を主とする「彼」と「此」と照応的機能が強い「之」「其」は明らかに異なり、この点は本研究にとっても重要である。しかし馬氏の観点は現代の文法学では受け入れられていない。[1] 本論文では指示代名詞と指示詞を区別せず、一律「指示代名詞」と呼ぶことにする。

古代漢語の指示代名詞については膨大な研究があり、以下に主な研究を列挙する。

漢語の指示代名詞を通史的に論じた著作は、楊樹達《高等国文法》(1930)、王力《中

[1] 王力（1954）は、漢語の指示詞を品詞的用法の差によって分類する必要はないと述べている。例えば、「這個」「那個」における指示成分は「這」「那」であり、量詞「個」を付けずに単独で使わうことができる。その「這」「那」は「実詞に代替する語」という意味で総括して「代詞」と呼ぶことを提唱している。

国語法理論》（1954）、《漢語史稿》（1980）、太田辰夫《中国語歴史文法》（1958）、呂叔湘《中国文法要略》（1982）などがある。これらの研究は漢語の各時代における指示代名詞の用法、語法機能を記述し、歴史的変化の過程を論じている。いずれも各時代の豊富な用例に裏付けられており、参照価値は高い。しかし、未解明の問題もなお少なくない。

このほか、特定の時代における指示代名詞を研究した断代的研究は数多く存在する。上古漢語については、まず周法高の《中國古代語法：稱代篇-中央研究院歴史語言研究所專刊之三十九》（1972）がある。鈴木直治《中国古代語法の研究》（1994）は、古代漢語の指示代名詞の体系を論じている。同書では指示代名詞の「其」「此」「是」「彼」「夫」について、語法別に大量の例文が載せられている。李佐丰《先秦漢語実詞》（2003）は先秦時代の代名詞を一つの章で論じている。張玉金《西周漢語代詞研究》（2006）は西周に限定し、《周易》、《詩経》、《尚書》、《逸周書》、金文、甲骨文などの文献を取り上げ、指示代名詞に関する問題を深く検討している。

中古漢語については、まず志村良治《中国中世語法研究》（1984）があり、「這」「那」の起源について、詳細に論じている。鄧軍《魏晉南北朝代詞研究》（2008）は、仏典、詩詞、史書など多くの文献を分析し、魏晉南北朝の代詞の様相を論述している。鄧軍によれば、中古文献で新しく現れた指示代名詞の割合は全体の 35%程度あり、その多くは南朝の民歌、詩詞など、方言的特徴が強い文献のものである。近代漢語については、呂叔湘《近代漢語指代詞》（1985）が代表的な著作であり、指示代名詞の諸問題を論じている。

本論文では、まず上古、中古及び中古と近代の過渡期の代表的文献を取り上げ、意味と用法の分析を試みる。しかし前述のように、指示代名詞は文脈依存性、現場依存性が高いため、文献に現れる指示代名詞の意味、用法を正確に捉えることは難しい。漢語の指示詞の歴史を明らかにするには、文献の分析だけでは限界がある。

この問題点を補うため、言語地理学の知見を利用して分析を行う。言語地理学は文献に頼らず、言語地図に現れた語の分布状況を分析することで、歴史的変遷の過程を推定する研究方法である。本論文では、現代方言と古典文献がそれぞれ語る指示代名詞の歴史を統合することによって、漢語の指示代名詞の変化の過程と変化の成因を明らかにすることを目的とする。文献を分析した上で、言語地理学の方法を利用し、従来の文献に頼った漢語指示代名詞の歴史の追究に新たな方向を提供したい。

現代方言の指示代名詞については、すでに曹志耘主編《漢語方言地圖集》（2008）が中国全土の指示代名詞の方言地図を載せている。しかしこの地図集では解釈が示されていない。本論文では既刊方言資料を調査することによって、改めて独自の方言地図を作成する。

既刊方言資料の調査にあたっては、指示代名詞の形式だけでなく、用法についても注意を払った。この面で特筆すべき研究として次のものがある。まず、張恵英《漢語方言代詞研究》（2001）は、南方方言を中心に代詞の諸問題を挙げて論じている。汪化云《漢語方言代詞論略》（2008）は、現代方言の代詞の諸相を検討している。陳玉潔《漢語指示詞的類型学研究》（2012）は、類型学と形式言語学の観点から漢語方言の指示代名詞の諸相を論じている。同書の付録には豊富な方言資料が載せられているが、指示代名詞の歴史について言及する所は少ない。このほか、各地点を対象とした方言志などの方言調査報告にも、指示代名詞の形式と用法を解説したものが多数あるが、他方言の影響や歴史的変遷について言及することは少ない。

興味深いのは、上掲、張恵英《漢語方言代詞研究》（2001）などが量詞の文法化現象を論じていることである。文法化は漢語指示詞の変化の過程に重要な影響を与えたと考えられる。本論文では、方言全国地図と指示代名詞の用法の検討によって、歴史的変遷及びその文法化のメカニズムを明らかにしていく。

2. 指示代名詞の歴史変化に関する問題点

漢語の指示代名詞に関する問題はいくつかある。その一つは指示代名詞を何種類に分けるかの議論である。以下では、先行研究の概要について述べる。馬建忠（1898）以来、漢語の指示代名詞は距離の遠近に基づいて、指示代名詞を近称－遠称の二つを区別するのが主流であったが、小川環樹（1981）は蘇州方言の指示代名詞が近称、中称、遠称の三分であることに基づいて、古代漢語の指示代名詞も近称、中称、遠称の三分であるとする仮説を提唱した。小川氏の仮説は、当時の中国の学界で古代漢語の指示代名詞は二分であるか三分であるかの討論を引き起こした。のちに志村良治（1984）は、古代漢語の指示代名詞は元々二分であったと主張している。呂叔湘（1990）も小川環樹（1981）の仮説に対して、異なる意見を唱えた。呂氏は漢語方言の中称の声母が近称または遠称のいずれかと同じであることから、漢語方言の中称形式は近称または遠称の形式から指示の意味が弱化したものと推定している。呂氏はまた古代漢語の指示代名詞も二類であったと主張している。呂叔湘（1990）以後、学界の主流は再び近称/遠称の二分法へと戻った。近年の現代漢語方言研究でも、呂叔湘（1990）の説を踏襲するものが多数である。例えば、張維佳（2005）は、志村良治（1984）及び呂叔湘（1990）の説を受け入れ、山西省晋語でみられる指示代名詞の三分は新しい分化であると述べている。

指示代名詞に関するもう一つの重要課題は、近称「這」と遠称「那」の起源である。上古漢語には多くの指示代名詞が並存していた。中古に入り、上古から引き継いだ指示代名詞の種類は若干減ったが、一方、新たな指示代名詞が現れた。概略を言えば、中古において頻度が高いのは近称の「此」と遠称の「彼」、「爾」、「其」、それに遠称と近称の区別が曖昧になった「之」である。それが中古末期から近代にかけて、近称「這」―遠称「那」のペアに単純化される。この間の変化については、音韻的にも説明が困難であり、どのような段階を経て「這」―「那」のペアが定着するに至ったのか諸説があり、

いまだに定論がない。以下に「這」「那」に関する従来の諸説を整理する。

「這」の語源について主要な説は二つある。一説は「者」、もう一説は「之」である。呂叔湘（1985：185）は「這」の本字（語源）は「者」としている。「者」は古代で指示的機能も有したが、方言消長によって「此」に代わった。そして、指示代名詞としての「者」は、文言における「者」の別の用法と区別するため、声調はもとの上声から去声になり、「這」、「遮」などと表記されるようになったと述べている。「這」の語源は「者」であるとの説によれば、音韻的に上古から中古、近代への変化は tiăg＞tsia＞tʂə であると考えられる。

太田辰夫（1958）と王力（1980）は「這」が「之」に由来すると考えている。太田辰夫氏は《詩経》や《荘子》に、「之」が「此」と同じように名詞を修飾する用法があることから、「這」が「之」に由来する可能性を指摘している。王力氏は「這」の「者」起源説に反対し、「者」は上古漢語で「被修飾詞」として用いられており、いわゆる修飾される対象であるが、なぜそのような「者」が突然他の指示代名詞のように主語、修飾語として用いられるようになったのかとの疑問を唱えて、「這」は「之」に由来すると主張した。

志村良治（1984）は「這」の語源を特定の表記に求めることをやめ、音韻を手がかりに、上古のどの音韻にあたるかに着目している。志村氏は唐末の漢蔵対音に記された「この～」という指示機能を有し、「ca」（c は tɕ を表す）という音声を有する種々の文字表記を比較して、「這」の語源を考察している。唐末に近称として使われた「這」「者」「遮」などの文字表記は同音か近似した音であったことを前提とし、うち「者」は《唐五代西北方音》[2] で「ca」（c は tɕ を表す）と表される。同じ声母「c」を表す文字は「之」「諸」「至」などがあり、これらの文字は上古に遡れば舌音であった音韻であり、中古に歯音に変化したものである。「者」は馬韻 3 等字であり、韻母は ia と推定されている。

[2] 羅常培 1933 《唐五代西北方音》，国立中央研究院歴史語言研究所。

こうして「者」の発音は「tɕia」と推定される。志村氏は「者」の発音は「tɕia」で、羅常培《唐五代西北方音》に基づいた唐代の方音においては口蓋化が進んだ結果、介母音脱落し、「ca」（tɕa）になったと指摘している。志村氏の仮説によれば、近称代名詞の上古から近代に至る声母変化の概略は、*t-/*ʈ- ＞tɕ- ＞tʂ-であると考えられる。

「那」に関しては、「爾」に由来するという説と、「若」に由来するという説が主流である。呂叔湘(1985：186)は「那」は「若」からであると主張している。「那」は「若」からであれば、音韻上変化は niag＞nʑia＞na と推定され、「這」の「者」からの仮説の変化 tiăg＞tsia＞tʂə と対応関係があると指摘している。

一方、太田辰夫（1958）と王力（1980）は「那」が「爾」に由来すると主張している。太田辰夫(1958)氏は「爾」が南北朝に見える遠称で、時間を表す語に用いられる傾向があるが、それは偶然であり、時間を表す名詞と結合しなければならない理由がないと述べている。王力（1980：331）は「爾」が上古から広汎に使われた長い歴史があり、「那」は「爾」から変化した可能性が高いと述べている。

志村良治（1984）は「那」の前身が「爾」である可能性を指摘している。「爾」は二人称代名詞と遠称代名詞の二つの用法がある。この二つの用法はいずれも使用頻度が高いため、中古では日母字（*nʑ-）への音韻変化に抗し、上古からの泥母字（n-声母）の発音のまま用いられ続けたと述べている。その結果、二人称代名詞は別の表記を求めて「你」と表記されるようになり、遠称の指示代名詞は「那」となった可能性があると指摘している。しかし、「那」について、声母だけでなく、韻母も変化したのは、他の要因が介在したためと指摘している。

このように、「這」「那」の問題は広く議論されてきた。

現代方言の分布から見ると、「這」―「那」の類型は北方を中心とした官話方言地域にのみ分布している。一方、南方方言の指示代名詞の類型は非常に複雑である。果たしてそれらは上古、中古における多彩な指示代名詞を継承しているのであろうか。南方方

言における指示代名詞を研究すれば、これらの問題を解く端緒を見つけることができるかもしれない。

3. 本論文の構成

本論文は四つの章から構成される。第一章では先行研究における指示代名詞に関する諸問題を取り上げ、研究の動機と目的を掲げる。

第二章では古代文献を対象として先行研究とは別の角度から独自の分析を試みる。上古、中古前期及び中古近代の過渡期と言われている中古後期の文献数種を取り上げ、指示代名詞の使用状況を調査、分析し、指示代名詞の歴史的変遷状況をまとめる。上古文献は、《尚書》、《論語》、《荘子》を取り上げる。この三文献を取り上げるのは、上古漢語にも地域差があり、これらはそれぞれ代表的な基礎方言を反映すると見られるためである。中古文献では中古前期の《世説新語》や一般民衆向けの宣教用の仏典を分析した。これらは当時の口語を比較的よく反映すると考えられる。中古から近代への変化を検討するため、中古後期の唐、五代に書かれた口語文献《敦煌変文》を取り上げる。

第三章では方言地図により、南方方言を中心に指示代名詞の歴史的変遷及び文法化のメカニズムを明らかにする。言語地図の作成についてはまず、方言における指示代名詞を声母によって分類する。漢語方言の指示代名詞は種類が非常に多く、また語源が特定できないものが多いため、漢字に頼った分類は事実上不可能である。そこで、本論文では、声母の調音位置を手がかりに分類をする。漢語方言の基礎語彙では、韻母、声調に比べ、声母が比較的安定しており、歴史的変化を蒙りにくいことが知られているからである（岩田 2009：12）。また、漢語方言では、数種類以上の遠称を有する方言もある。筆者が収集した方言データにも、指示代名詞を三つ以上を持っている方言がある。それらの方言は前述の呂叔湘（1990）が指摘したように声母が近称または遠称のいずれかと同じである。よって、本研究も指示代名詞の二分法と前提として、方言の指示代名詞

は遠/近の二項対立であると見なし、遠称に複数の種類がある場合は、語形の違いとして扱う。つまり、近称なり遠称なりに複数の形式があるものとする。具体的な例は第三章で地図のとともに紹介する。

地図作成については、金沢大学人間社会環境研究科博士後期課程在籍中の林智氏が開発した PHD system を使用した。

第四章は全文の結論である。

第二章　古代文献における指示代名詞

1.　文献上の指示代名詞

1.1　先行研究

本節は古代漢語における指示代名詞を取り上げ、先行研究及び文献を参考に、古代漢語における指示代名詞の歴史的変遷を明らかにしたい。

王力(1980)は上古漢語の指示代名詞を近指(近称)、遠指(遠称)、特指（遠近区別のない指示詞）に分けた。王力の分類に従えば、近称に属するのは「之」、「斯」、「此」、「是」、遠称に属するのは「彼」である。このほか、遠近の意味が不明確な指示詞「若」、「爾」があるが、「若」は近称と見なされる場合が多く、「爾」は遠称として用いられる場合が多いと述べている。王力が言う“特指”とは「其」を指し、「特指」は遠近関係を表さず、「其」に修飾される対象は“正しく照応している”と表す。王力によれば、中古以後の指示詞「這」、「那」はおおよそ唐代に現れ始め、うち「那」は上古の「爾」あるいは「若」に由來する。。

周法高(1972)は指示代名詞を近称と遠称に二類した上で、近称には「茲」、「斯(鮮)」、「時」、「是(寔/氏)」、「此」、「若」、「爾」、「乃」、「之」があり、遠称は「彼」、「匪」、「夫」、「其」があるとしている。

史存直(1986)によると、甲骨文の時代には、「之」、「茲」という二つの近称代名詞しか存在しなかった。遠称代名詞はその時代にはまだ現れておらず、周秦時代になってはじめて文献に見られるようになる。史氏によれば、「這」、「那」上古漢語の「之」、「若/爾」に由來する。

以上の先行研究における上古の指示代名詞の遠/近関係を下表にまとめる：

指示代名詞	之	茲	斯	此	是	時	若	爾	其	厥	夫	彼	匪
王　力(1980)	近		近	近	近		近	遠	特指			遠	
周法高(1972)	近	近	近	近	近	近	近	近	遠	遠	遠	遠	遠
史存直(1986)	近	近	近	近	近	近	遠	遠	遠	遠	遠	遠	遠

表に見られるように上古漢語における「若」、「爾」、「其」は近称、遠称どちらに分類するか、まだ定説になっていない。

時代が下り、中古時代になると漢語の指示代名詞には新しい要素が見られるようになる。六朝から「底」「箇」などの新たな指示代名詞が現れる。唐代に「這」「那」が現れる。元代には、「兀」と書かれる指示代名詞が現れたが、現代の北京語では使われておらず、一部の方言にしか見られない。

現代北京語で近称—遠称のペアとして使れる。「這」「那」の語源については様々な説がある。特に遠称の「那」は上古から中古への文献における指示代名詞の用例が時代的に不連続であり、「這」「那」は上古の如何なる指示代名詞にを由来するか、定説がない。

本稿はこれらのすべての問題点を解くことができないが、本章ではまず文献における指示代名詞の変遷の跡を正確に捉えることに努める。

1.2　使用テキスト

本章では上古、中古前期、中古後期の三期について、それぞれの文献を考察する。筆者が自ら解読し、各時代の文献における指示代名詞の具体的用法を把握することを目的とする。

上古については、《尚書》、《論語》、《荘子》の三文献を取り上げた。中古の文献としては、《世説新語》及び仏典四種（《六度集経》、《生経》、《百喩経》、《賢愚経》）を対象

とする。また、中古から近代の過渡期の資料としては、《敦煌変文》を取り上げる。使用するテキストは以下に列挙する。実際の閲読作業には「中央研究院漢籍電子文献　古漢語語料庫」を使用した。

[3]

《夏僎尚書詳解》((宋)夏僎撰，清乾隆敕刻武英殿聚珍本)

《陳經尚書詳解》((宋)陳經撰，清乾隆敕刻武英殿聚珍本)

《論語意原》((宋)鄭汝諧撰珍本，清乾隆敕刻武英殿聚)

《莊子集釋》((清) 郭慶藩撰；王孝魚點校，中華書局，1995)

《世說新語箋疏》((南朝宋)劉義慶著；(南朝梁)劉孝標注；余嘉錫箋疏；周祖謨等整理，上海古籍出版社，1993)

《大正新脩大藏經》—《六度集経》、《生経》、《百喩経》、《賢愚経》(大藏經刊行會編，新文豐出版，1983)

《敦煌変文新書》(潘重規編著，文津出版社，1994)

例文の和訳については、《敦煌変文》は筆者が自ら翻訳した。他の文献については、以下の翻訳、注釈本に拠ったが、問題のある場合は筆者が改めた個所がある。

《尚書》《論語》《荘子》《世説新語》:《中国古典文学大系》1981，平凡社。

《賢愚経》《百喩経》:《国訳一切経　本縁部七》1930，大東出版社。

《生経》《六度集経》:《国訳一切経　本縁部十一》1930，大東出版社。

2.　上古文献における指示代名詞の考察

2.1　上古文献の選択について

周生亜（1980）は上古漢語の人称代名詞が方言系統により三類に分けられると述べ

[3] 中央研究院漢籍電子文献　古漢語語料庫　http://hanji.sinica.edu.tw/

ている。(1)《尚書》は殷方言（今の河南省）の代表である。(2)《詩経》は洛邑方言（今の河南省）の代表である。(3)《論語》、《孟子》、《左伝》は魯方言（今の山東省）あるいはその地域の北方方言である。この周氏の観点を受けて、本節では上古の文献から《尚書》、《論語》、《荘子》を取り上げ、それらにおける指示代名詞の語法機能により分類し、指示代名詞としての使用頻度を統計する。

現在我々が見る《尚書》は「偽《孔伝古文尚書》」全 58 篇である。その中で 33 篇は今文尚書の篇名と一致し、真正の尚書と認められるが、他の 25 篇は後世の偽作と考えられている。従って、今回の考察には 33 篇を用いる。《尚書》各篇が書かれた時代は殷から戦国時代であり、それが代表する方言地域は殷、周王朝の活動地域、即ち今の陝西、河南などの中原地域と考えられる。

《論語》は上述周生亜（1980）が指摘するように、魯地域の方言と見なす。

《荘子》については、全書 33 篇であるが、荘子本人の著作であることが確実なのは最初の内篇 7 篇だけであり、その他は後世に書かれた可能性があるため、今回は内篇 7 篇を対象とすることにした。荘子は戦国時代の宋国の人であり、《荘子》における用語も一般的に楚語と考えられている。[4] 賈学鴻（2012）は、《荘子》における語彙は楚方言の特色を有すると述べている。

2.2　上古文献の考察結果

以下の各表は統計結果をまとめたものである。T 類は舌歯破裂音声母、TS 類は舌歯破擦音と摩擦音、Ø は零声母である。N 類は声母 n/l/ȵ を含める。K 類は牙喉音類声母であり、P 類は唇音類声母である。再構音は郭錫良（2010）に拠った。表の太い線の右側は遠称、左側は近称である。近遠関係が曖昧な「若」及び「爾」については、文脈によって、《尚書》に現われる「爾」の 1 例のみを遠称と判断し（表 1「爾」の修飾語の

[4] 趙彤（2006：5）は音韻上の観点から、《荘子》と《楚辞》の音韻特徴も一致であると述べている。

位置を参照)、残りの「爾」3 例と「若」6 例は近称と判断した。「若」と「爾」は上古音で声母 ȵ を有したと推定されるので、表 1 では N 類型の近称とする。

表 1《尚書》における指示代名詞の語法機能別統計

声母類型	T	TS						Ø	N		K		P	
指示代名詞	之	茲	斯	此	是	時	鮮	惟	若	爾	其	厥	夫	彼
再構音	ʈĭə	tsĭə	sĭe	ts^{h}ĭe	ʐĭe	ʐĭə	sĭan	ʎiwəi	ȵĭăk	ȵĭei	gĭə	kĭwăt	pĭwɑ	pĭa
主語		6			6	8	1				13	6		
修飾語	1	20		3	2	25		5	1	1	47	173		
目的語	53	6			3	8					5	6		
合計	54	32	0	3	11	41	1	5	1	1	65	185	0	0

表 2《論語》における指示代名詞の語法機能別統計

声母類型	T	TS						Ø	N		K		P	
指示代名詞	之	茲	斯	此	是	時	鮮	惟	若	爾	其	厥	夫	彼
再構音	ʈĭə	tsĭə	sĭe	ts^{h}ĭe	ʐĭe	ʐĭə	sĭan	ʎiwəi	ȵĭăk	ȵĭei	gĭə	kĭwăt	pĭwɑ	pĭa
主語			8		3						1			
修飾語	2		15		6				3		76		9	
目的語	225	3	22		16					2	3			1
合計	227	3	45	0	25	0	0	0	3	2	80	0	9	1

表 3《荘子》における指示代名詞の語法機能別統計

声母類型	T	TS						Ø	N		K		P	
指示代名詞	之	茲	斯	此	是	時	鮮	惟	若	爾	其	厥	夫	彼
再構音	ʈĭə	tsĭə	sĭe	ts^{h}ĭe	ʐĭe	ʐĭə	sĭan	ʎiwəi	ȵĭăk	ȵĭei	gĭə	kĭwăt	pĭwɑ	pĭa
主語			1	20	34						57		1	5
修飾語	5			8	16				2		44		27	3
目的語	245			12	43					1	17		0	6
合計	250	0	1	40	93	0	0	0	2	1	118	0	28	14

以上の結果をまとめると、上古三文献における近称代名詞「之」「時」「鮮」「是」「茲」

「此」「斯」「惟」「爾」「若」の中で、頻度が最も高いのは三文献とも「之」であり、逆に「時」「鮮」「惟」は《尚書》以外の文献では指示代名詞として使われない。「爾」「若」は三文献とも現れ、「若」（6 例）はすべて修飾語として用いられる。「爾」は主に目的語として用いられ (4 例中 3 例)、修飾語としても用いられる (4 例中 1 例)。残りの「是」「茲」「此」「斯」について、「之」に次いで頻度が高いのは、《尚書》では「茲」、《論語》では「斯」、《荘子》では「是」である。この結果は各々の方言の特色を反映していると考えられる。注意すべきは、《論語》では「此」、《尚書》では「斯」、《荘子》では「茲」が、それぞれ現れないことである。これに対して、「是」は三文献ともに見られる。

遠称代名詞については、頻度が最も高いのは「厥」及び「其」である。「厥」は《尚書》で「其」と語法機能上相補関係にある。即ち、「厥」は修飾語として、「其」は主語として使われる。「厥」は《尚書》以後の文献では指示代名詞として用いられず、「其」と合流したと考えられる。残りの「彼」及び「夫」も相補関係にある。主語及び目的語の場合には「彼」を用い、修飾語の場合には「夫」を使う。

2.3　上古文献における「之」及び「其」

2.2 により、使用頻度が最も高いのは、近称代名詞では「之」、遠称代名詞では「其」であることが分かった。「之」及び「其」は遠近関係のペアであるが、語法機能上も相補的な所がある。即ち、「之」は主に目的語として使われ、修飾語として用いられるが、主語としての例はない。「其」は修飾語としての頻度が高いが、主語及び目的語としても使われる。また、両者とも照応的な用法(anaphora)としても用いられる。この場合は遠近関係の境界は不明である。本節ではこの二つの指示代名詞を取り上げ、その用法を論じる。

三つの文献で、「之」が修飾語として使われる例は多くなく、以下の 8 例しかない。(四角で囲んだ箇所)

(1) 天惟五年須暇之子孫，誕作民主，罔可念聽。（尚書）

天は五年の間、成湯の子孫が真に人民の主となるのを待っていた。しかし、よく考えて聖人となったと認めるべきことがなかった。

(2) 子曰：「由也，千乘之國，可使治其賦也，不知其仁也。」「求也何如？」子曰：「求也，千室之邑，百乘之家，可使為之宰也，不知其仁也。」（論語）

孔子曰く「由は諸侯の国に於いて、軍事を取り扱わせられましょう。しかし仁者かどうかは存じません。」子曰く「求は卿大夫の領地またはその家に於いて、執事におくことができましょう。しかし、仁者かどうかは存じません。」

(3) 子曰：「南人有言曰：『人而無恆，不可以作巫醫。』善夫！」「不恆其德，或承之羞。」(論語)

孔子曰く「南方の諺にこういうのがある。『心変わりの多い人には神巫や医師も手が出せぬ』と。よい言葉じゃないか。」「変わらぬ心を持たぬ者は常に屈辱を受く」

(4) 適莽蒼者，三餐而反，腹猶果然；適百里者，宿舂糧；適千里者，三月聚糧。之二蟲又何知！ (莊子)

郊外に出かけていく時は、三食分の食糧でも、おなかがひもじいことはない。百里もある所へ出かけていくときは、前夜から米つきをしなくてはならないし、千里もある所へ出かけていくときは、三ヶ月も糧食あつめをしなくてはならない。この小鳥どもに鵬のことがわかるはずはない。

(5) 之人也，之德也，將旁礴萬物以為一世蘄乎亂，孰弊弊焉以天下為事！(莊子)

この人とこの徳とは万物をぶっつけてひとつにしようとするものだ。世間のものがいくら治めてほしいとたのんでも、どうしてこせこせと天下のこ

とに心をくだくことがあろう。

(6) 雖然，之二者有患。（莊子）

しかし、この二つにも心配がある。

例（1）の「之」は前文の文脈によって「殷」のことを指し、ここの「之子孫」は殷の子孫を指し、「之」はいわゆる前文の照応（anaphora）である。この場合では、遠近の境界は不明確となり、近称と解釈してもよいが、例(1)のような場合は「之」の照応対象「殷」を三人称代名詞とし、それを照応する「之」は三人称所有と解釈してもよい。例（2）と（3）も前文に述べたこと（下線のところを指す）を照応するが、文脈により「其」（網掛けで示した箇所）と対比しているので、従来の注釈本では近称と解釈されることが多い。例（4）~（6）は近称としか解釈できない。このように「之」は修飾語として使われる時、多くの場合は近称代名詞である。

「其」は修飾語として使われる用例が多く、三つの文献で合計 167 例がある。その中で照応の用法が多い。照応の場合には、遠近の境界が不明確となるが、「之」に対して、「其」は遠称と解釈できる例が圧倒的に多い。以下で、いくつかの例を挙げる。(7)~（12）は「其」が遠称として用いられる例である。

(7) 亦言其人有德（尚書）

（されば官に就するべき有徳者を評定するには、九つの徳の基準に照らして、）その人はそのうちのこれこれを行なっている、というようにするのです。

(8) 其刑其罰，其審克之（尚書）

その刑や罰の適用は細かにしらべなければならぬ。

(9) 子夏曰：「博學而篤志，切問而近思，仁在其中矣。」(論語)

子夏曰く「博く学んで熱心に道に志し、切実な問題として問い、手近な所考えてゆくならば、おのずと仁に近づくであろう。」

(10)子曰：「不在其位，不謀其政。」(論語)

孔子曰く「その地位にいなければ、その職務に容喙しないこと」

(11)惡！惡可！子非其人也（莊子)

ああ、とても、とても、あなたはそんながらじゃありません。

(12)意而子曰：「雖然，吾願遊於其藩。」(莊子)

意而子曰く「おっしゃるとおりですが、私も道の門口ででも遊びたいとおもいましてね。」

「其」には前述「之」の例（1）のように、前に述べたものを照応し、三人称所有と解釈される例もある。

（13）~（15）は「其」が三人称所有として使われる例である。照応対象が例文に現れる場合は下線で表す。

(13)閲實其罪（尚書)

その罪を解除する。

(14)子夏曰：「君子信而後勞其民，未信則以為厲己也；信而後諫，未信則以為謗己也。」（論語)

子夏曰く「為政者は人民に信用されてから後、彼らを労役に従事させるがよい。まだ信用されないのにそんなことをさせば、いじめるものと思われるだろう；君主に信用されてから後、諫めるがよい。まだしんようされないのにそんなことをすると、単に謗っているように受け取られるだろう。」

(15)彼特以天為父，而身猶愛之，而況其卓乎！人特以有君為愈乎己，而身猶死之，而況其真乎！（莊子)

彼すなわち人間は自己を産んでくれた肉親の父に対しては、心からなる愛情と従順を捧げるのであるが、肉親の父に対してさえそうであるとすれば、肉親の父よりも遥かに偉大な父、すなわち自然の理法に対して、これを愛

しこれを従ってゆくべきことはいうまでもなかろう。君主の存在を自己以上のものと考え、彼のためには生命をさえ捨てるのであるが、人間世界の支配者に対してさえそうであるとすれば、それよりも遥かに偉大な真の支配者――宇宙の理法に対して、これを至上とし、これに随順してゆくべきことはいうまでもあるまい。[5]

以上の例（1)、(13）~（15）により、「之」「其」が照応として用いられる場合は遠近の境界が不明確となるが、修飾語と用いられる場合は概ねに「之」が近称、「其」は遠称という使い分けがあることが分かる。また、上古文献では、「之」「其」が他の指示代名詞の後で所属関係を表す機能もある。この場合に「指示代名詞＋之/其＋名詞」構文になり、その指示代名詞が指すものと名詞との所属関係を表す。

(16)瞽者無以與乎文章之觀，聾者無以與乎鐘鼓之聲。豈唯形骸有聾盲哉？夫知亦有之。是其言也，猶時女也。(莊子)

めくらは美しいいろどりをたのしむことはできないし、つんぼは、鐘、太鼓の音楽を楽しむことはできない。めくらやつんぼというのは身体の上だけのことではない、こころにもあるというが、そのことばはまさに君のことにあてはまる。

(17)是其塵垢秕糠，將猶陶鑄堯舜者也，孰肯以物為事！(莊子)

そのからだのあかや排泄物から、堯や舜のような聖人がつくられたくらいだ。それが、外物に心をくだくようなことをする気になるものか。

(18)丘也與女，皆夢也；予謂女夢，亦夢也。是其言也，其名為弔詭。(莊子)

孔丘だってお前と同じく夢みているのだ。わしがお前のことを夢みているのだというのも夢なのだ。こうしてこのようなことばを弔詭という。

(19)怒其臂以當車轍，不知其不勝任也，是其才之美者也。(莊子)

[5] 《中国古典文学大系》は、荘子のこの部分は文脈からするとやや唐突だと指摘しており、和訳が載ってない。そのため福永光司（1966)《荘子　内篇》に拠った。

そのひじをいからして、車のわだちに立ちふさがろうとします。とうてい、その任にたえないことを知らないのです。自分の才のすぐれたことをたのんでいるのです。

(20)方其夢也，不知其夢也。夢之中又占其夢焉，覺而後知其夢也。且有大覺而後知此其大夢也，而愚者自以為覺，竊竊然知之。(莊子)

夢を見ているときは、夢だということはわからない。夢の中でまた夢占いをしてたものが、攻めてから夢だったことはわかる。それに、大きな目覚めがあって、はじめてこの人生も大きな夢だということがわがる。しかし愚かなものは自分が覚めているとかんがえ、こざかしげに、しったかぶりをする。

(21)而宋榮子猶然笑之。且舉世而譽之而不加勸，舉世而非之而不加沮，定乎內外之分，辯乎榮辱之境，斯已矣。彼其於世未數數然也。(莊子)

ところが、宋栄子はにったり笑っている。世の人がそろって非難しても、気落ちしない。それは内と外と区別をはっきりし、光栄と恥辱の限界を心得ている。というだけのことである。この人はこの世に生きていっこうこせこせしていない。

(22)向吾入而弔焉，有老者哭之，如哭其子；少者哭之，如哭其母。彼其所以會之，必有不蘄言而言，不蘄哭而哭者。是（遯）〔遁〕天倍情，忘其所受，古者謂之遁天之刑。(莊子)

さっきわたしが入って弔うと、年をとったものは、わが子を亡くしたときのようにないており、わかいものは、わが母をなくしたときのように泣いていた。あの人がこんなにおおぜいの人をあつめたのは、悔やみをいわせるつもりもないのに、悔やみをいい、泣かせるつもりもないのに泣いてしまう、というようにさせるものがあったからであろう。これは天の道理を

のがれ、、自然の情けにそむき、天より受けたものを忘れているからだ。

(23)曰：「密！若無言！彼亦直寄焉，以為不知己者詬厲也。不為社者，且幾有翦乎！且也彼其所保與眾異，而以義（譽）〔喻〕之，不亦遠乎！」(莊子)

シーっ、めったなことをいうな。あの神もこの木に憑いただけのことだ。そして、自分を知らないものがののしったと思っているのだ。社の木とならない（有用の）ものだったら、たぶんは伐り倒されずにはすむまい。それにだ、あの木が生きてきたのは世俗の考え方で誉めたりするのは、とてもうとい話しではないか。

(24)弟子厭觀之，走及匠石，曰：「自吾執斧斤以隨夫子，未嘗見材如此其美也。先生不肯視，行不輟，何邪？」(莊子)

弟子はあきるほど木をながめ、走って匠石に追いついていった。「わたしは斧をとって、先生の弟子になってから、こんなにりっぱな材を見たことがございません。だのに、先生はみようともせず、どんどんいってしまわれたのは、なぜですか。」

このように「之」「其」が他の指示代名詞に後接して所属関係を表す現象は上古では少なくない。この点は鈴木直治(1994：291，315，343，385)も指摘している。[6] 同書で挙げられた例を以下に挙げる。[7]

---

[6] 原文："古代漢語については、「此」によってある人物などを指し、かつ、其の人物が、其の次の語の表す人、物、事などに対して、所属の関係にあることを表している場合もある。この場合には、その「此」の後に、更に「其」が用いられている。「此」は、この「其」を介して、その指示する人物などが、所属の関係にあることを表すのが、古代漢語における表現の仕方であった。この「其」は、ある人物などを指しているその前の「此」を、さらに指示し、かつ、その人物が、その次の語の表す人、物、ことなどに対して、所属の関係にあることを表す働きをしているのである。"（同書では「是」は「此」と同じであると述べている）

"「彼」は修飾語として、直接にその名詞の前に用いられている場合は、上述にように、通常、指示的に修飾するのであって、その所属などの関係について修飾することはない。「彼」がある人物などを指し、その次の名詞に対して、所属などの関係について修飾する場合には、通常、その「彼」の次に、「其」が用いられている。このことは近指の指示詞の「此」「是」においても、同様であって、このように、「其」を介して、其の指示する人物が所属などの関係にあることを表すのが、古代漢語における表現の仕方の通例であった。"

[7] 和訳は同書に載せられたものに拠る。

彼＋之/其：

(25)彼其道遠而險，又有江山。我無舟車，奈何？(莊子)

かの国への道は、遠く険しく、その上、川や山がある。わたくしには、舟も車もなく、どうしたらよかろう。

(26)世人以形色名聲為足以得彼之情。(莊子)　世人は、(外にあらわれている)形色や名称、音声をば、それによってかの道(どう)の実相をとらえることが十分できるものと思っている。

(27)彼其髮短，而心甚長。其或寢處我矣。(左傳)

あいつの髪は短くなったが、心は甚だ執念深い。もしかすると我々を殺して敷物にするかもしれない。

(28)取天下者，非負其土地而從之之謂也，道足以一人而已矣。彼其人苟一，則其土地且奚去我而適他。(荀子)

天下を取るということは、(諸国の人々が)その土地を背負って、つき従ってくる、ということをいうのではない。その政治のやりかたが、人々をひとしく帰服させることが、よくできるのである。先方の国の人々が、もしかりに、ひとしく帰服して来たとするならば、その土地は、いったい、どうして、こちらを捨てて他にゆくことがありましょうか。

夫＋其：

(29)去之。夫其口眾，而我寡。(左傳)

立ち去ろう。あいつらの口は多いが、こちらは少ないから。

(30)臣聞之，天之所啓，十世不替。夫其子孫必光啓土，不可偪也。(國語)

私は聞いております、天が導き佑けられるものは、十世の間すたれない、

と。あの人の子孫は、必ずや大いに国土をひろげますから、近づいてはなりません。

此＋其：

(31)此其代陳有國乎？……非此其身，在其子孫。(左傳)

この方は、恐らく陳に代わって、国を保有されるであろう。……この方の身におこるのではなく、その子孫におこりましょう。

(32)叔向見司馬侯之子，撫而泣之，曰：“自此其父之死，吾蔑與比而事君矣！”(國語)

叔向（晋の大夫）が、司馬侯（もと晋の大夫）の子を見て、それを撫でながら泣いていた。“この子の父がしんでからは、私はともに仲よく君に事える人がなくなった。”

(33)劫殺死亡之君，此其心之憂懼，行之痛苦也，心甚於厲矣。(韓非子)

（臣下から）脅かされたり殺されたりして命をなくす君主は、この人の心の憂懼と肉体の苦痛とは、必ずや癩よりもひどいことである。

(34)子噲以亂死，桓公蟲流出戶而不葬。此其何故也？人君以情借臣之患也。(韓非子)

燕王の子噲は、内乱のために死に、斉の桓公は、死体から虫がわいて、戸口からはい出て来るようになっても、葬られなかった。このことの原因は何か。君主がその心情を臣下に示したことからする災いなのである。

(35)行此數年，而民歸之如流水。此其後宋伐杞，狄伐邢衛。(管子)

（斉の桓公はが、管仲の勧めによって、税を軽くし刑をゆるくするなどした。）このことを数年行ったところ、民が流水のように帰服して来た。このようになった後に、宋が杞を伐ち、狄が邢、衛を伐った。

是＋其：

(36)雖與之俱學，弗若之矣。為是其智弗若歟？(孟子)

その人と一緒に学んでいても、その人に及びません。その人の智恵がおとっているためでしょうか。

(37)其濟洛河穎之間乎！是其男子之國，虢鄶為大。(國語)　恐らく、済・洛・河・穎のよっつの川の間の地方であろう。その地方の子爵・男爵のくにでは、虢と鄶とが大国である。

(38)聖人也者，道之管也。天下之道管是矣。……詩言其志也，書言是其事也。(荀子)

聖人というものは道を統べくくるものである。天下の道は、この人に統べくくられる。……《詩》はこの人の心志をのべるのであり、《書》はこの人の事業をのべるものである。

(39)當世之重臣，主變勢而得固寵者，十無二三，是其故何也？人臣之罪大也。(韓非子)

今の世の重臣たちで、君主がやりかたを変えても、もと通りの君寵を維持できるものは、十人の中、二三人もいない。このことの原因は、なにか。臣下の犯している罪が、大きからである。

「之」及び「其」はおそらく前に述べたことを照応し、遠近意味がニュートラルになり、三人称代名詞のような代用の機能のみを有し、代用の対象の所属関係をあらわすようになったのだろう。[8] 「之」「其」が修飾語として上古時代の他の指示代名詞と異な

[8] 呂叔湘(1982：154，166)は“古代漢語における指示代名詞で、三人称代名詞として見なせるのは「之」「其」「彼」であるとしている。しかしながら、この三つの代名詞は三人称代名詞として用いられる場合、語法機能によって相補関係があり、「之」は目的語、「其」は修飾語（所属関係）、「彼」は主語という使い分けがある。いずれでも現代の「他」のような完全な三人称代名詞とはいえない”（原文は中国語、訳は筆者）。さらに、“古代漢語では、「之」「其」「彼」という三人称

る点は、所属関係を表せることである。

「之」と「其」の頻度が上古の指示詞で高いのは、このように所属、照応関係を表す機能を有し、且つ遠近関係も表せる機能を持ったためであろう。[9] 注意すべきは、時代が下がり、中古になると、指示代名詞「之」は修飾語としての機能がなくなり、目的語の機能しか持たなくなることである。その役割は上古と同じく“照応関係を表し、指示する”という機能であるが、そのような「之」は遠近意味がニュートラルになった。一方、「其」は指示代名詞としての機能は上古から中古までは変わっていない。また、「之」と「其」の照応的な機能は中古になると、ニュートラルになる例が多くなり、それに伴って、指示代名詞であるか人称代名詞であるか判断が困難になる場合も増える。詳しくは次の節に述べる。

3. 中古文献における指示代名詞の考察

中古の指示代名詞は上古より種類が少なるが、一方ではこの時代から現れる新たな指示代名詞がある。鄧軍（2008：31-33）は、六朝時代の指示代名詞はその多くが上古から継承されたが、一部の指示代名詞は口語で使われなくなり、文語にのみ用いられると述べている。つまり、中古の文語では、上古から継承された指示代名詞が多い。本稿はまず中古前期の口語特色を反映する文献を取り上げ、《世説新語》及び仏典四冊（《六度集経》、《生経》、《百喩経》、《賢愚経》）を考察する。《世説新語》は人物を記述する志人小説であり、会話を記述する場面が多く、口語用語が多い。同時代には志怪小説もある

代名詞は「対語指称」（照応指示）と言うべきであり、実は三人称代名詞ではなく、指示代名詞に属する。現代の三人称代名詞「他」は完全な三人称代名詞であり、代用の機能のみ用いられ、指示の機能がない。”と述べている。なお、「彼」は「之」「其」と比べれば、照応として用いられる場合でも、遠近意味は薄くならない。呂叔湘は同書で“「彼」はたとえ人を指す時も、遠称指示の意味は強く、三人称の「彼」と解釈するより、「指示代＋人」という「あの人」と解釈したほうがよい”と指摘している。

[9] 陳玉潔（2011）は遠近意味がニュートラルになった指示詞は常にその言語で使用頻度が最も高い指示詞であると述べている。「其」の頻度が高いのは照応関係を表す場合にニュートラルになることと関係があるのだろう。

が、《世説新語》との用語が近いため、志人小説を代表として取り上げた。《六度集経》、《生経》、《百喩経》、《賢愚経》、当時の一般民衆のための説教用の物語であり、その用語は口語に近いと考えられる。

なお、鄧軍（2008）は、六朝時代に現れる指示代名詞として、「個」「那」「許」「底」「能」「阿堵」「爾馨」「爾許」「寧馨」「如馨」を挙げているが、今回の文献調査ではそれらすべてが現れたわけではない。

3.1　世説新語

表 4 は統計結果を示したものである。

表 4《世説新語》における指示代名詞の統計

	指示代名詞	再構音	文献全体に現れる総数	指示代名詞として用いられる数	用法
近称代名詞	是	ʐĭe	471	154	修飾語及び目的語の用例が多い。 修飾語：是國、是時, 目的語：是以、以是、由是、如是。 指示代名詞以外の例は多数が判断詞（copula）又は是非の「是」として使われる。
	此	tsʰĭe	694	694	すべて指示代名詞として使われる。
	斯	sĭe	35	35	すべて指示代名詞として使われる。 例：如斯、當斯之時、若斯、在斯、斯人、斯言、斯舉、斯語。
	之	tɕĭə	4028	?[10]	上古のような修飾語の機能が無くなり、前に出たことを照応し、目的語としてしか使われない。 指示詞以外の用法は多く構造助詞として使われる。

[10] 中古以後の「之」は指示代名詞として、「照応関係を表し、指示する」という機能だけをもっているため、物を指す場合にその「之」を三人称代名詞とみなすか、指示代名詞とみなすか判断が困難であり、ここでは保留する。以下、同じく照応関係を表す「其」も同様である。

	茲	tsǐə	4	3	目的語として「若茲」1 例。 修飾語 2 例。残り 1 例は地名。
	阿堵	ɑ tu	3	3	全て近称代名詞として使われる。
遠称代名詞	爾	nʑǐe	146	16	主に修飾語： 爾時(9)、爾日(3)、爾馨(2)、爾夜(1)、爾夕(1)。 指示詞以外の 130 例は二人称代名詞所有、副詞に添える助詞「～のように」（例：忽爾）。
	彼	pǐe	41	11	主に修飾語： 彼此(5)、彼人(1)、彼岸(2)、彼節者(1)、彼庶黎(2)。 指示詞以外の 30 例は三人称代名詞
	其	gǐə	1048	?	前に出たことを照応し、主語及び修飾語として使われる。 三人称代名詞所有の用法もある。

上古で指示代名詞として使われた「時」「若」は世説新語では指示詞として用いられない。「時」は 695 例で全部「時間」という意味であり、「若」は 342 例で全部「～のよう」「もしかして」という意味である。また、「那」は世説新語に現れるが、33 例すべて疑問詞「なんぞ」「どれ」という意味である。以下に《世説新語》における用例を挙げる。

指示代名詞の「是」

《世説新語》における「是」は修飾語及び目的語の用例が多い。（40）は目的語の「是」の例、（41）は修飾語の「是」の例である。

(40)先公勳業如是！君作東征賦，云何相忽略？

亡父はあのような大功を立てられたのに、君は東征賦をかきながら、なぜこれを無視するのだ。

(41)車胤父作南平郡功曹，太守王胡之避司馬無忌之難，置郡于酆陰。是時胤十

餘歳，胡之每出，嘗於籬中見而異焉。

車胤の父が南平郡の功曹をしていたとき、太守の王胡之は司馬無忌の禍難を避けるために郡の役所を澧水の南に移した。そのころ車胤は十余歳であったが、王胡之は外出するたびに、いつも垣の中から、これを見て感心していたが、その父に向かっていった。

非指示代名詞の「是」

「是」は指示代名詞以外の例は多数が判断詞（copula）又は是非の「是」として使われる。

(42)李元禮風格秀整，高自標持，欲以天下名教是非為己任。（是非の「是」）

李元礼は風格すぐれて、隙間のない人物であり、みずからを持することが高く、天下の名教を維持し、是非を正すことを、自分の任務としていた。

(43)桓公見謝安石作簡文謚議，看竟，擲與坐上諸客曰：「此是安石碎金。」（「是」は判断詞）

桓公は謝安石が作った漢文帝のおくりなを定めるための奏議文を見て、同座の客達の前にぽんと投げていった。「これは安石の金のかけらだよ。」

(44)王之學華，皆是形骸之外，去之所以更遠。（「是」は判断詞）

王朗が華歆のまねをするのは、すべて外形の末ばかりだ。それでは華歆からいよいよ遠ざかるばかりだよ。

近称代名詞「阿堵」

阿堵は六朝時代に現れる指示代名詞であり、《世説新語》では 3 例がある。以下に《世説新語》にあるすべでの例を挙げる。

(45)殷中軍見佛經云：「理亦應阿堵上。」

殷中軍は仏典を見ていった。「理はきっとこの中にもあるに違いない。」

(46)王夷甫雅尚玄遠，常嫉其婦貪濁，口未嘗言「錢」字。婦欲試之，令婢以錢遶床，不得行。夷甫晨起，見錢閡行，呼婢曰：「舉卻阿堵物。」

王夷甫はもともと深遠な道をたっとぶひとであったので、いつもその妻が貪欲なのを憎み、また一度も銭という字を口にしたことがなかった。妻はこれをいわせようと試み、下女に命じてその寝台の周囲に銭を置き、歩くことができないようにしておいた。王夷甫は朝早く起きあがり、銭があるく場所をふさいでいるのを見ると、下女を呼びつけていった。「こいつを全部取り除けろ。」

(47)顧長康畫人，或數年不點目精。人問其故？顧曰：「四體妍蚩，本無關於妙處；傳神寫照，正在阿堵中。」

顧長康が人物を描くとき、時によると数年間も瞳を描きいれないことがあった。ある人がその理由をたずねると、顧長康はいった。「姿体の美醜は、もともと画の本質とは無関係だ。精神を伝え、その輝きを写しだすのは、まさにこいつのうちにこそあるのだ。」

三人称代名詞の「彼」

指示代名詞の「彼」は主に修飾語として使われる。例えば、彼人、彼岸、彼節者、彼庶黎。以下に三人称代名詞の「彼」の例を挙げる。（48）～（50）の「彼」は三人称代名詞の用例と見なしたが、実際の所、三人称か遠称か不明確な部分がある。（48）は「我」と対比しているため、三人称と判断した。（49）の「彼」は「卞令」という人を指すため、三人称と判断した。（50）のは「彼公榮者」は「彼、公榮氏は」或いは「あの公榮氏は」といずれに解釈してもよい。

(48)客主有不通處，張乃遙於末坐判之，言約旨遠，足暢彼我之懷，一坐皆驚。

問者答者の双方とのやりとりが行きづまりにくると張憑はここぞとばかり遥か末席からこれに決論をつけた。言葉は簡潔でありながら、意味は深長であり、問者答者の双方の心に満足をあたえるものであった。一座の人々はみな驚いた。

(49)高坐道人於丞相坐，恆偃臥其側。見卞令，肅然改容云：「彼是禮法人。」

高坐道人は丞相の席にいるとき、いつもそのそばでねころんでいたが、卞令をめにすると、しゃんと威儀を改めた。そして、いった。「あの人は礼法のかたじゃ」

(50)王戎弱冠詣阮籍，時劉公榮在坐。阮謂王曰：「偶有二斗美酒，當與君共飲。彼公榮者，無預焉。」

王戎がまだ弱冠のころ、阮籍を訪ねた。そのとき劉公栄も座にいた。阮籍は王戎に向かっていった。「ちょうど二斗の美酒があるから、君と一緒に飲もう。あの公栄という男は、ほっておけばよい。」

照応を表す三人称代名詞の「其」及び指示代名詞の「其」

以下は「其」の用例である。三人称代名詞の例は□で表示し、照応対象を下線で表す。これらの例における「其」の照応対象は明らかに人であるため、三人称代名詞と判断した。しかし、物、事を指す場合の「其」は判断上の困難がある（注 10 参照）。例えば、例（51）の「不知其味」（その味を知らず）の「其」は中国語で三人称の「他的」或いは遠称の「那個」のいずれにも訳されてもよい。指示代名詞の「其」を網掛けで表す。

(51)顧榮在洛陽，嘗應人請，覺行炙人有欲炙之色，因輟己施焉。同坐嗤之。榮曰：「豈有終日執之，而不知其味者乎？」後遭亂渡江，每經危急，常有一

人左右已，問其所以，乃受炙人也。

顧栄が洛陽にいたとき、かつて人の招きに応じて出かけていったことがあった。その席上であぶり肉をくばっている者が、あぶり肉をほしそうにしているのに気づいたので、顧栄は自分のものを食うことをやめ、その者にくれてやった。同座していた人々が笑うと、顧栄はいった。「一日中自分の手で持ちあるきながら、自分では一度もその味を知らないということがあってよいものだろうか？」のち顧栄が戦乱にあって江南に渡った時、危ない目にあうたびに、いつも一人の男があって、自分を助けてくれた。そこで、そのわけを訪ねてみると、それはあぶり肉を自分からもらった男であった。

(52)王恭從會稽還，王大看之。見其坐六尺簟，因語恭：「卿東來，故應有此物，可以一領及我。」恭無言。

王恭が会稽から帰ってきたとき、王大が会いに出かけた。みると、王恭は六尺もある竹を編んだ敷物の上に座っている。そこで、王恭に話しかけた。「君は東の産地から帰ってきただけあって、こんなものを持っているのだね。どうだ、これを一枚わしに分けてくれないか。」王恭はだまったままであった。

(53)王武子、孫子荊、各言其土地人物之美。王云：「其地坦而平，其水淡而清，其人廉且貞。」孫云：「其山嶉巍以嵯峨，其水渫而揚波，其人磊呵而英多。」

王武子と孫子荊とが、それぞれ自分の土地や人物のよさを言いあった。王武子はいった。「その地はなだらかで、平かに、その水は淡くしてすみわたり、その人は廉くて貞しい。」孫子荊はいった。「その山はたかだかとして、嵯峨えたち、その水はみなぎりわたって波を揚げ、その人はおおらかですぐれたものが多い。」

照応を表す目的語の「之」及び構造助詞の「之」

以下（54）~（57）は「之」の用例である。構造助詞の例は網掛けで表示する。照応を表す目的語の「之」を□で表示し、照応対象を下線で表す。以下の例では「之」の半数が照応であり、残り半数は構造助詞であると判断される。

(54)荀巨伯遠看友人疾，值胡賊攻郡，友人語巨伯曰：「吾今死矣，子可去！」巨伯曰：「遠來相視，子令吾去；敗義以求生，豈荀巨伯所行邪？」賊既至，謂巨伯曰：「大軍至，一郡盡空，汝何男子，而敢獨止？」巨伯曰：「友人有疾，不忍委之，寧以我身代友人命。」賊相謂曰：「我輩無義之人，而入有義之國！」遂班軍而還，一郡並獲全。

荀巨伯ははるばる遠方から友人の病気見舞いにやってきた。ところが、ちょうどそのとき、胡の賊軍が友人の住む郡に攻め入ってきた。その友人は荀巨伯に向かっていった。「私は今にも死ぬ身だ。君はここを立ち去ってほしい。」すると荀巨伯は答えた。「はるばる見舞いにきたのに、君はすぐ立ち去れというが、義をやぶって生きのびようとすることは、この荀巨伯には、とてもできないことだよ。」とうとう賊軍がやってきて、荀巨伯に向かって、告げた。「大軍がおしよせ、郡の内には、すっかり人影もなくなっている。それなのに、ただひとりふみとどまるとは、いったいお前はどうした男だ。」荀巨伯は答えた。「友人が病気で、捨てて逃げるに忍びないのだよ。できれば、私の身と、友人の命とを、たがいに引き換えにしてもらえないだろうか。」すると賊兵は顔を見合わせていった「我々は道義をわきまえない人間であるくせに、道義をそなえた人間の国に入りこんで

しまったらしい。」そういって賊たちは軍を引きかえし、そのまま帰っていったので、郡全体が事なきを得たのであった。

(55)華歆遇子弟甚整，雖閒室之内，嚴若朝典。陳元方兄弟恣柔愛之道，而二門之裏，兩不失雍熙之軌焉。

華歆は自分の子弟に対する態度が非常にきちんとしており、くつろいだ部屋の内でも、まるで朝廷の儀式のようにおごそかであった。反対に陳元方兄弟は思いきりなごやかで、慈愛の気風につつまれていた。そのくせ、双方の家庭の内は、どちらも仲よく楽しむという道を失うことがなかった。

(56)管寧、華歆共園中鋤菜，見地有片金，管揮鋤與瓦石不異，華捉而擲去之。又嘗同席讀書，有乘軒冕過門者，寧讀如故，歆廢書出看。寧割席分坐曰：「子非吾友也。」

管寧と華歆とが、一緒に家の畑で鋤で耕し、野菜の手入れをしていたが、ふと土のなかに金のかけらがあるのを見つけた。管寧は目もくれずに鋤を動かし、瓦や石区別をしなかったが、華歆は金のかけらを拾い上げ、投げ捨ててしまった。また、あるとき二人が同じ席の上に読書していたところ、りっぱな車にのり、礼冠をいただいた貴人が門前を通りかかった。管寧は読書をつづけてやめなかったが、華歆は読書をやめ、外に出て見物した。管寧は席をひきさいて、別々にすわり、そしていった。「君は私の友ではない。」

(57)王朗每以識度推華歆。歆蜡日，嘗集子姪燕飲，王亦學之。有人向張華說此事，張曰：「王之學華，皆是形骸之外，去之所以更遠。」華歆、王朗俱乘船避難，有一人欲依附，歆輒難之。朗曰：「幸尚寛，何為不可？」後賊追至，王欲舍所攜人。歆曰：「本所以疑，正為此耳。既已納其自託，寧可以急相棄邪？」遂攜拯如初。世以此定華、王之優劣。

王朗はかねがね見識や度量という点で華歆に敬服していた。蜡の祭りの日に、華歆はその一族の若者たちを集めて宴会を開くのを例としていたが、王朗もそのまねをした。ある人が張華にこのことを話したところ、張華はいった。「王朗が華歆のまねをするのは、すべて外形の末ばかりだ。それでは華歆からいよいよ遠ざかるばかりだ。」華歆と王朗とが、一緒に舟を乗って戦乱を避けたことがある。そのとき一人の男が道づれにしてくれと頼んだ。華歆はこれに難色を示したが、王朗は「さいわい、まだ余裕があるから、何も断る必要はあるまい。」といって、のせてやった。そののち賊兵が追いつきそうになった時、王朗はその道づれの男を見捨てようとした。そのとき華歆がいった。「はじめ私がためらったのは、こういうことになりはしないかと心配していたからだ。だが、一度その頼みを許した以上、危急だからといって見捨てることはできないではないか。」そこで、そのままその男を道づれにしてやった。世間はこのことによって華歆と王朗との人物の優劣を定めるようになった。

3.2　仏教経典四冊の考察

統計結果を表 5 にまとめる。

表 5 仏教経典における指示代名詞の統計

	指示代名詞	再構音	文献全体に現れる総数	指示代名詞として用いられる数	用法
近称代名詞	是	ʑĭe	2386	約 1200	半数は非指示代名詞の判断詞（copula）として用いられる。 残り半数は指示代名詞。主語、修飾語、目的語のいずれの位置にも立てる。
	此	tsʰĭe	1390	1390	すべて指示代名詞と使われる

	斯	sĭe	554	554	すべて指示代名詞と使われる
	茲	tsĭə	61	52	目的語として 45 例、その中で「若茲」は 34 例。修飾語 7 例。
	之	tɕĭə	4220	?	上古のような修飾語の機能が無くなり、前に述べたことを照応し、目的語としてしか使われない。 指示詞以外では多く構造助詞として使われる。
遠称代名詞	爾	nʑĭe	1063	564	指示代名詞としての用法は主に修飾語。うち 563 例は「爾時」(その時)、1 例は「爾年」(その年)。 それ以外の用法は二人称代名詞所有、副詞「そのように」及び助詞の用例。
	彼	pĭe	794	?[11]	指示代名詞又は三人称代名詞として使われている。
	其	gĭə	2726	?	指示代名詞として、前に出たことを照応し、主語及び修飾語として使われる。 三人称代名詞所有の用法もある。

「那」は調査した 4 種類の仏典で 263 例あるが、すべて指示代名詞ではない。9 例は「どれ」という意味であり、1 例は「なんぞ」という意味である。残りの 253 例は音訳の人名または地名である。

「是」は指示代名詞として、主語、修飾語、目的語のいずれの位置にも立てる。(58)は主語の例、(59)は目的語の例である。そのほか、「是」が「是時」「是言」のように修飾語として用いられる。4 種類の仏典で、用例の半数は非指示代名詞の判断詞(copula)である。(60)はその例。

(58)何謂三施？外施內施大施，是為三施。(生経)

何をか三施と謂ふ。外施、内施、大施是を三施と為す。

[11] 仏典における「彼」は「之」、「其」と同じように照応として用いられる例もある。その場合に三人称なのか、遠称なのか不明確な所がある。

(59)王聞是已給賜刀杖尋即遣之。（百喩経）

王、是を聞き已り刀杖を給賜ひ尋いで即ち之を遣はす。

(60)我非是人，皆是龍王。（賢愚経）

我は是れ人に非ず。皆是れ竜王なり。

注目されるのは「爾」の使用である。「爾」は上古文献で指示代名詞として用いられる例は少なく、主に二人称代名詞として用いられる。《論語》で現れる「爾」は 22 例の中で 13 例が二人称代名詞であり、2 例が指示代名詞であり、残りの 7 例は副詞である。は《尚書》では 164 例の中で 162 例は二人称代名詞であり、ただ 1 例が指示代名詞である。《世説新語》で指示代名詞として用いられる比率は 11%である（146 例の中で 16 例）。今回調査した仏典で「爾」が指示代名詞として使われる比率は 53%である（1063 例の中で 564 例）。

中古文献における「爾」の使用状況を分析すると、「爾」は多く時間詞と併用され、「是時」「彼時」と互用されている。上古で現れる「爾」は例（61）のように目的語が多い。

(61)豈不爾思？（論語）

どうしてこう（これを）思わないか。

中古文献に現れる「是時」「彼時」「爾時」は文脈に従えば、「あの時」「その時」という意味になる。上古では「爾」は近称である場合が多いが、中古の「爾」は明らかに遠称と見なしたほうがよい。以下に実例を挙げよう：

(62)佛告諸比丘，爾時獼猴，今婬蕩女人是，鱉者分衛比丘是。彼時放逸，而慕求之，不得如願。今亦如是。佛說如是。莫不歡喜。(生經)

佛、諸々の比丘に告げたまはく「爾の時の獼猴とは今の淫蕩の女人是なり、鼈とは分衛の比丘是なり。彼の時放逸にして之を慕え求めて願の如く得ず」。佛、説きたまふこと是の如し。歓喜せざるは莫し。

(63)一時佛遊波羅奈國，與大比丘眾千二百五十人及諸菩薩俱。㊟㊟五百幼童，行步遊戲，同心等意。相結為伴，日日共行，一體無異。一日不見，猶如百日，甚相敬重。彼時一日俱行遊戲，近於江水。興沙塔廟，各自說言「吾塔甚好，卿效吾作。」其五百童。雖有善心。宿命福薄。(生經)

一時、佛、波羅奈国に遊び大比丘衆千二百五十人及び諸の菩薩と俱なりき。爾の時、五百の幼童あり、行歩遊戯し、心を同じく意を等しくす。相ひ結んで伴と為り日日共に行き一体にして異なし。一日見えざれば、猶百日の如く甚だ相ひ敬重す。彼の時、一日俱に行き遊戯し江水に近づく。砂の塔廟を興し各自説きて言く「吾が塔甚だ好し、卿、吾に効ってつくれ」と。其の五百童、善心有りと雖も宿命の福薄し。

(64)佛於是時，廣說妙論。……佛告阿難「乃往過去無量之劫，波羅奈國，有大長者。初生一子，端正無比。當于是時，其家有人。從海中來，齎一鳥卵，用奉長者。長者納受，經少時間，其卵便剖。出一鳥雛。……因此鳥故，得延壽，佛告阿難「彼時長者子，今婆世蹟是。㊟㊟王女者，今伎家女是。㊟㊟鳥者，則目連是。」(賢愚經)

佛、是の時に於て、広く妙論を説き給ふ。……佛、阿難を告げ給ふやろう「乃往、過去無量の刧に波羅奈国に大長者有り。初め一子を生む。端正比無し。是の時に當り其の家に人有り。海中より来り一つの鳥の卵を齎らし用って長者に奉る。長者納受し少しの時間を経てその卵便ち剖く。一つの鳥雛を出す。……此の鳥によるが故に寿命を延ばすことを得たり。」佛、阿難を告げ給ふやろう「彼の時の長者の子とは今の婆世蹟是なり、爾の時の王女とは今の伎家の女是なり。爾の時の鳥とは即ち目連是なり。」

例（62）に“今”と対比されていることから、「爾時」及び「彼時」は今ではない“あ

/その時”のことを指すことがわかる。例（63）（64）で「是時」「彼時」「爾時」が連用されているが、同じ時間を指している。

仏典における「其」の指示機能は《世説新語》と同じであり、前に述べたことに照応している。修飾語としては主に遠称として用いられ、三人称所有関係を表すこともある。その照応対象は文脈で判断しなければならないので、判別がつかない場合が多い。例えば、以下の例（65）の「其國」は前文に現れる「鄰國」に照応するか人の「目連」に照応するか、いずれとも解釈できるため、判断がつかない。

(65)佛告諸比丘，仁王者我身是，鄰國王者目連是。其國群臣者今諸比丘是，菩薩慈惠度無極行布施如是。（六度集経）

佛、諸の比丘に告げたまはく、仁王とは我身是なり、隣国の王とは目連是なり。其の国群臣とは今の諸比丘是なり。菩薩の慈恵度無極なり。布施を行ずること是の如し。

他の「其」の例を数例挙げる。照応対象が例文に現れる場合はそれを下線で表す。

照応を表す遠称修飾語の「其」

(66)海邊有國，其國枯旱，黎庶飢饉更相呑噉。（六度集経）

海邊に国あり、其の国枯旱したり、黎庶飢饉となり更なる相呑噉す。

(67)「黎庶眾多靡求不獲。吾得彼土不亦快乎。」王意始存。金輪南向，七寶四兵，輕舉飛行，俱到其土。（六度集経）

「黎庶衆多にして求めて獲ざるなし。吾れ彼の土を得んも亦快ならずや」王の意始めて存したり。金輪南に向ひ七宝の四兵は軽挙して飛行して俱に其の土に到れり。

(68)諸佛以食為禍。其果然矣。（六度集経）

諸仏は食を以て禍と為す。其れ果たして然らん。

(69)殺為兇虐，其惡莫大。（六度集経）

殺は兇虐たり、その悪大なるは莫し。

照応を表す三人称所有の「其」

(70)吾當濟焉，不睹佛儀，不聞明法，吾當開其耳目除其盲聾，令之睹聞無上正真眾聖之王明範之原也。（六度集経）

吾れ當にこれを済ふべし、佛儀を睹ず、明法を聞かず、吾れ當にその耳目を開きてその盲聾を除き、之をして無上正真衆聖の王、明範の原を睹せしめ、聞かせしむべきなり。

(71)有梵志來。其年六十。（六度集経）

梵志有りて来る。その年六十なりき。

(72)盗者曰「實貧困無以自活。違聖明法蹈火行盗。」王悵愍之，嘉其至誠，恧然内愧，長歎而云「民之飢者即吾餓之，民之寒者即吾裸之。」（六度集経）

盗者曰く「実に貧困にして以て自ら活くるなし。聖明王に違して火を踏んで盗を行せり」と。王之を悵愍し、その至誠を嘉して、ぢくぜんとして内に愧ぢ、長嘆して云はく「民の飢えし者は即ち吾れ之れを餓ゆ、民の寒きものは即ち吾れ之を裸にす。」と

照応を表す三人称主語の「其」

(73)睹樹有人，懼不敢往。其飢五日冒昧趣果。兩俱無害。（六度集経）

樹に人有るを睹て懼れて敢て往かず。その飢えしこと五日なり。昧を冒して菓に趣けり。両つながら俱に害なし。

(74)不親賢眾而依十惡者。其與豺狼共檻乎。（六度集経）

賢衆と親しまず而も十悪に依るものは其れ豺狼と檻を共にせんか。

照応を表す三人称目的語の「其」

(75)令其展情獲孝婦之徳。（六度集経）

その情を展けて孝婦の徳を獲せしめんことを

(76)池中有龜。龜名金。瞽一眼，亦於水戯觸二兒身，兒驚大呼，王則問其所以。云池中有物，觸怖我等。（六度集経）

池中に亀有り。亀を金と名く。一眼瞽なり、亦水に於いて戯る。二児身に触れたり、児驚きて大いに叫べり、王則ちその所以を問ふ。云はく「池中にもの有り、触れば我等を怖る」と。

三人称主語及び修飾語の「彼」

「其」と同じく三人称と遠称の機能を兼ねる「彼」について、遠称代名詞として使われる場合は主語の位置には立たず、修飾語及び目的語として用いられる。三人称として使われる場合は、主語、修飾語、目的語いずれにも使われる。以下《六度集經》の例をいくつかあげる。「彼」は三人称として用いられる場合に、三人称なのか、遠称なのか不明確な所がある。例（77）、（78）は「吾」と対比しており、三人称と判断した。例（79）の「彼毒」は「あの毒」か、前に述べた「毒蛇」を指し、「毒蛇の毒」かいずれにも解釈できる。

(77)釋心即懼曰「彼徳巍巍必奪吾位，吾壞其志行即畢乎。」（六度集経）

釈、心に即ち懼れて曰はく「彼の徳は巍巍たり、必ず吾が位を奪はん。行即ち畢らんや」と。

(78)王曰「勝則彼死，弱則吾喪。彼兵吾民皆天生育。」（六度集経）

王曰く「勝たば即ち彼死す、弱けば即ち吾れ喪ふ。彼の兵も吾が民も皆天の生育なり。」

(79)時有毒蛇遶城七匝體大百圍。見普施來仰然舉首。普施念曰「斯含毒類必有害心，吾當興無蓋之慈以消彼毒也。」（六度集経）

時に毒蛇あり、城を遶りて七匝あり。体の大きさ百囲あり。普施の来るを見て、抑然として首を挙げたり。普施念じて曰く「斯れ毒を含むの類は必ず害心があり。無蓋の慈を興して以て彼の毒を消すべし。」

遠称修飾語及び目的語の「彼」

(80)道士即化為一轅之車，以送王還晨各離矣。天化為梵志復乞其車。即復惠之。轉進未至彼國數十里，天復化為前梵志來索銀錢。（六度集経）

道士即ち化けして一轅の車を為りて以て王に送り。還りて晨に各々離れたり。天化けして梵志となり、復其の車を乞ふ。即ち復之を恵めり。転進すれども未だ彼の国に至らざること数十里なるに、天復化けして前の梵志となり、来りて銀銭を索む。

(81)吾自彼來，舉身惱痛，又大飢渴。（六度集経）

吾れ彼こより来れり、身を挙げて悩痛す。又大いに飢渴せり。

(82)時諸比丘，同共發意。彼時三人，言語柔軟，威德殊妙，依本福行，多所獲致，過踰於彼。（生経）

時に、諸の比丘、同じく共に意を発す。彼の時三人、言語柔軟にして威徳殊妙なり、本の福行に依り獲致る所多く、彼よりも過踰ゆ。

3.3　中古文献考察のまとめ

中古の指示代名詞は上古から継承されたものが多いが、新たな指示代名詞も現れた。上古で使われた「夫」はもはや遠称代名詞として使われなくなった。「之」は指示代名詞として、修飾語の機能を喪失し、照応を表す目的語の機能のみを担うようになり、遠

近の対立がニュートラルになった。中古時代の「之」は例(54)~(57)のように構造助詞としても使われている。「其」は遠称的機能を有し、照応の機能を有する点で上古と変化がない。この照応の機能により、「其」は遠近の対立がニュートラルになり、三人称代名詞と見なせる例もある。「其」のこの特徴について、王力(1980)は遠近の対立がない“特指”と解釈している。

上古漢語で頻度が「之」「其」に次ぐ「是」「彼」については、「彼」は遠称的機能と三人称的機能を兼ね備えている。中古で「是」は近称代名詞として用いられるが、頻度上は「此」より低い。「是」は中古で指示代名詞のほか、判断詞（copula）としてもよく使われている。今回考察した中古文献で、「是」は半数程度が判断詞として用いられる。それに対して、「此」は指示代名詞としてのみ使われている。

4. 中古から近代へ——敦煌変文の考察

志村良治（1984）は、漢語の指示代名詞は上古から中古への変化について、概ね「此」「茲」「是」などの近称が「這」に交替し、「爾」「若」「其」「彼」などの遠称が「那」に交替したと推定している。近代以後、指示代名詞の「這」－「那」二分法が確立した。《敦煌変文》は中古後期（唐、五代）に書かれた文献であり、指示代名詞の変化の過程を窺うことができる。統計結果を以下の表 6 にまとめる。

表 6《敦煌変文》における指示代名詞の統計

	指示代名詞	再構音	文献全体に現れる総数	指示代名詞として用いられる数	用法
近称代名詞	是	ʑǐe	2094	約 350	修飾語約 100 例，目的語約 250 例。指示詞以外の用法は判断詞(copula)、または“是非”の“是”の意味で使われている。

	此	tsʰĭe	1361	1361	すべて指示代名詞と使われている。
	斯	sĭe	117	85	目的語「如斯」は 75 例,「因斯」1 例。
	之	tɕĭə	3006	?	上古のような修飾語の機能が無くなり、前に述べたことを照応し、目的語としてしか使われていない。他は多く構造助詞として使われている。
	這	tɕa	87	87	すべて指示代名詞と使われている。
	者	tɕĭa	1080	2	「這」と互用。
	遮	tɕĭa	66	2	「這」と互用。
遠称代名詞	爾	nʑĭe	107	61	指示代名詞の用法の中で、修飾語としての語例「爾時」が 40 例，他の 20 例は目的語、あと 1 例は「爾許」(そのような)。 二人称代名詞 1 例、ほかは助詞。
	彼	pĭe	119	?	指示代名詞かつ三人称代名詞。
	其	gĭə	1049	?	指示代名詞として、前に出たことを照応し、主語及び修飾語として使われている。 三人称代名詞所有の用法もある。
	那	na	107	2	「這」との対比。 指示詞以外の用法は疑問代名詞(なんぞ)として用いられる。

今回の調査で、《敦煌変文》では「這」及び「那」が指示代名詞として使用されていることがわかったが、すでに唐代の他の資料にも指示代名詞としての「這」と「那」が現れている。以下（83）（84）は太田辰夫（1958）があげる例である。

(83)這廻帰去免来無？（白居易詩）

このたび帰ったらまた来ることをまぬがれるか。

(84)必是那狗。（朝野僉載）

きっとあの狗だ。

今回調査した《敦煌変文》では「這」は全 87 例のすべてが指示代名詞である。(85) は「這」が直接に名詞を修飾する例、(86) は「個」とともに名詞を修飾する例である。

(85)這有相夫人顔貌平正，又復能歌。

この福相がある夫人は容姿が端麗であり、歌も上手である。

(86)人人皆道天年盡，無計留他這個人。

人々は皆「寿命が尽きてしまった。この人を救う方法はない」といっている。

これに対して「那」は全 107 例中、指示代名詞の用例はわずか 2 例であり、かつ「這」との対比という条件下で現れる。

(87)一泡破，一泡成，雨點如珠水上行，也似人身無兩種，這邊纔死那邊生。

一つの泡が破れば、一つの泡が立つ。雨は珍珠の如く、水の上に歩いている。人の身はそれと同じく、こちらの誰かが死ねば、あちらの誰かが生まれる。

(88)那邊禮佛聲遼(嘹)亮，這伴全(金)經次第開。

そちらの礼佛の声が高らかに響き渡る。こちらの金経が次々開く。

他の 105 例は疑問代詞の「なんぞ」または「どれ」である。疑問代詞の例を 2 例挙げる。

「どれ」の意味の「那」:

(89)理亂境兵傷眾暴，稅田民不怨煩苛。筭應也會求財路，那箇門中利最多？

（大臣たる君たちは）戦乱と暴動を治め、民衆も税賦に対しての文句がない。君たちは儲ける方法を知っているはずだから、最も利益を儲けるのはどれなのか教えなさい。

「なんぞ」の意味の「那」:

(90)大有顔容相似者，爭那尊卑事不同。

容貌が相似している人がよくいるが、それぞれ尊卑が異なっている。それはどうしても仕方ないことである。

中古時代に指示代名詞としての使用頻度が飛躍的に上がった「爾」は《敦煌変文》で107例中61例が指示代名詞である。その中に「爾時」は40例、「當爾之時」「自爾之時」は19例がある。また、《敦煌変文》では二人称代名詞の「你」が現れ、逆に「爾」が二人称代名詞として使われる例はただ1例である（例（91））。残りの45例はすべてが副詞に添える助詞である。（92）は助詞の例である。

(91)上天使爾知何道。

天は君に何の道理を知らせるのか。

(92)死王忽爾到來。

死の王は突然に来る。

5. 第二章のまとめ

上古で頻度が最も高いのは近称の「之」及び遠称の「其」である。両者とも照応の機能を持ち、三人称的機能と指示代名詞的機能を有した。中古になると、「之」は、専ら修飾語の機能がなくなり、照応関係を表す目的語として使われるようになった。「其」の機能は中古でも変化がなかった。

上古で頻度が「之」「其」に次ぐのは近称の「是」及び遠称の「彼」「夫」である。「彼」と「夫」は相補関係にあった。「彼」は主語及び目的語、「夫」は修飾語として用いられた。中古に至り、「夫」は指示代名詞として用いられなくなった。中古で「是」は半数

程度判断詞(copula)として用いられようになり、指示代名詞としての頻度は「此」に超えられた。「此」は中古時代、使用頻度で「之」に次ぐ近称代名詞となった。近称の「斯」は中古でも見られるが、使用頻度は高くなく、「是」の次である。

中古に起きた重要な変化がもう一つある。それは「爾」が遠称代名詞として使われる頻度が著しく高くなることである。上古における「爾」は主に二人称代名詞として用いられる。《論語》で現れる「爾」は 22 例の中で 13 例が二人称代名詞であり、2 例が指示代名詞であり、残りの 7 例は助詞である。《尚書》では 164 例の中で 162 例が二人称代名詞であり、指示代名詞の用例は一例しかない。中古文献で、「爾」が遠称代名詞として使われる頻度はほぼ「彼」と同じになる。但し、中古文献における「爾」はよく時間を表す語と結合する。今回考察した中古の「爾」は半数以上が時間を表すものであり、意味は「あの時」「その時」である。

《敦煌変文》で「這」は近称代名詞として現れ、「遮」「者」と書かれることもある。87 の用例があるが、それらはすべて近称代名詞である。同時に「那」も遠称代名詞として現れ、「這」と対比して用いられる。しかし、「那」は「這」と比べれば、使用頻度はまだ低い。107 例の中で、遠称代名詞として使われる 2 例のみである。しかも、この 2 例は近称の「這」と対比して使われている。

上古及び中古で現れた近称代名詞「之」(ʈǐə) 「是」(ʑǐe)「此」(tsʰǐe)「斯」(sǐe)はすべて舌歯音声母を有する。中古末期（敦煌変文）に現れた「這」も舌歯音声母である。遠称代名詞については、上古で「其」(gǐə)「彼」(pǐa)「夫」(bǐwa)があるが、中古に至り、「夫」は指示代名詞として用いられなくなった。「其」は遠称としての指示機能が弱化し、遠近対立において中立化した。「爾」は中古で遠称代名詞としての使用頻度が高くなり、「彼」とほぼ同じである。「那」は中古末期（敦煌変文）に遠称代名詞として出現した。N 声母系の遠称代名詞はおおよそ中古から用いられたことが分かる。

本研究では「爾」と「那」を N 類声母（n/l/ɲ を含めている）としたが、両者の関係

について解釈しなければならない。「那」の語源が「爾」であるかどうかまだいくつの疑点がある。「爾」の声母は中古前期では n または ȵ となり、中古後期で nʑ と変化した。一方、「那」は n を有する。しかも、「爾」は上声、「那」は去声で声調上も対応していない。

また、次章で詳述するように、北方方言は主に N 声母類の遠称代名詞が分布している。N 声母類遠称代名詞の勢力は西南部から南方方言の領域に侵入し、広西壮族自治区にも N 声母類遠称代名詞分布している。牙喉音類の遠称代名詞は南方方言によく見られるが、唇音類遠称代名詞の分布は点在であり、地点数は少ない。文献によれば、N 声母類の遠称代名詞は中古時代から飛躍的に頻度が上がるが、牙喉音系の「其」及び唇音類の「彼」はずっと遠称代名詞として存在している。なぜ、唇音類遠称代名詞は現代方言で淘汰されてしまったのか問題である。

「彼」の問題について、まず指示代名詞としての機能を検討してみよう。上古文献で「其」と「彼」はいずれも三人称的機能と指示代名詞的機能の双方を有する。しかし、「彼」が修飾語として用いられる場合に「彼＋名詞」という組み合せの「彼」は遠称代名詞の機能しか有さない（注 6 参照）。「其＋名詞」の「其」は文脈によって、遠称代名詞的機能または三人称的機能のいずれかを果たす。「其」は照応の機能として使われる場合には、遠近の意味は薄くなることもあるが、「彼」は照応関係を表しても、遠称の意味が濃い（呂叔湘 1982：156）。[12] 中古では「彼＋名詞」の「彼」が三人称的機能として使われる用例も現れるようになったが、同時代の末期に三人称代名詞の「他」が出てきたため、「彼」は三人称代名詞として使われる必要性は段々なくなったのであろう。また、「彼」の特性については鈴木直治(1994：323)が以下のように指摘している。

> 「彼」は、その外的なものを表すことから、一種の疎外感を伴っていることも多く、それで、『外之之詞』などとも解かせられている。……その指示するも

[12] 原文“雖然指人的時候無妨用「他」來翻譯，「彼」指示氣味還是很濃……用白話來說，還是「那個人」比「他」更合適些。”

のに対して、一種の疎外する情意がこめられていることが多い。「彼」の持つ重要な一側面として注意しておかなければならない。

口語では「彼」が特殊な感情を表す場合しか使われないため、無標の遠称代名詞ではなくなったと考えられる。現代方言で唇音系の「彼」の使用が少なくなったのはこのような事情を反映していると考えられる。

こうして、「爾」が中古で頻度が高くなった原因も解釈できる。それはおそらく牙喉音類の「其」は中古期に遠近関係が中立的になり、唇音類の「彼」は疎外の感情が含んでおり、口語では疎外、軽蔑な感情を表す場合しか使われなかった。故に、遠近関係を表すことができ、また感情表現にも無標的(unmarked)な遠称代名詞を求めざるをえなかったのであろう。そして、「爾」は中古で指示代名詞として使われる頻度が高くなり、それに連動して指示代名詞の「爾」に何か特殊な音韻変化が起きたかと考える。例えば、上古で二人称代名詞として常用された「爾」はその後も古音である n-を保存した。それが「你」である。中古になって遠称代名詞としても使われるようになった「爾」は、二人称代名詞の「爾」と区別するため、韻母が i から a に変化した。その結果、「爾」の語源が不明となり、別の表記を求めて「那」で表すようになった。この仮説はそれを証明する証拠が不足しているが、もし正しければ、「這」の語源も推定できるかもしれない。志村良治（1984）は「這」の発音は中古で tɕa と推定している。その韻母の a はおそらく中古で遠称代名詞として使われ、音声が na になった段階の「爾」に類推したと考える。そして、中古声母 tɕ-は上古の*t-/*ʈ-に由來するのであるから、「這」の語源は上古で ʈ-声母を有した「之」である可能性がある。

第三章　指示代名詞の地理的分布と歴史的変遷

1.　指示代名詞の形式と地理的分布の特徴

指示代名詞は変化を蒙りやすく、特に南方方言では方言間の対応関係を見出すことが難しい。このような場合、声母に着目して分類をすると効果的な場合があることが語彙の研究によって明らかになっている（岩田 2009 : 12）。つまり声母は韻母や声調に比べると歴史的変化を蒙りにくく、比較的安定していると考えられる。そこで本章では指示代名詞を声母によって分類し、広域地図を作成した上で、地理的分布に基づき、指示代名詞の歴史的変化の過程を論じる。

1.1　指示代名詞の形式と類型化

筆者は指示代名詞の第一成分の声母を取り上げ、地図を作成した。方言資料では指示代名詞は「指示詞＋量詞」のように示されることが多いが、このような場合は、量詞を除いた第一成分に着目する。例えば、北京語の近称代名詞「這個」は「這」と量詞「個」から構成されるが、本稿ではこの第一成分「這」の声母を取り上げる。なお、漢語方言では、近称の他、二種類以上の分類を持つ方言もあるが、本稿では、近称以外の語形は、すべて遠称とする。遠称の多種類は語形の違いとして扱い、地図上に並列する。例えば、広西壮族自治区臨桂県の指示代名詞は、近称「這個」、中称「箇個」、遠称「那個」の三つがある。この場合、近称の地図に「這個」の語形を当て、遠称の地図には「箇個」及び「那個」を二つの語形として並列して示す。

〔地図 I〕に近称、〔地図 II〕に遠称の形式を示した。いずれも声母の調音位置により、五大類型に分類した。E 類以外は近称と遠称で分類が相同である。本章では、これ

らの類型を大文字で表し、下位の小類型を小文字で表す。具体的な語形は論文末尾の〈語形一覧〉に掲げる。

1）近称

A 類 N 音類：声母 n/l/ȵ-を含む。

B 類唇音類：声母 p-を含む。

C 類牙喉音類：声母 k/g/h/x/ŋ-を含む。

D 類零声母類：母音 i/a/ɛ/u-を含む。

E 類舌歯音類：声母 t/d/tʂ/ts/tʃ/tɕ/z/ʥ-を含む。

2）遠称

A 類 N 音類：声母 n/l/ȵ-を含む。

B 類唇音類：声母 p/m-を含む。

C 類牙喉音類：声母 k/g/h/x/ŋ-を含む。

D 類零声母類：母音 i/a/ɛ/o/e-を含む。

E 類「兀」類：声母は零（u-）又は v。

1.2　地理的分布の特徴

1）近称

A. N 音類

A-1：n-/ ȵ-

安徽省南部、湖北省、四川省、雲南省の長江沿岸に線条的に分布している。また、広東省中部にまとまった分布がみられるほか、福建省西南部、広西壮族自治区にも点在している。

A-2：l-

広東省中部、福建省南部、江西省北部、台湾客家語地域に分布している。また、長江流域の江蘇省、湖北省、湖南省、四川省にも点在している。

B. 唇音類

P-：湖南省南部の寧遠県にみられる。

C. 牙喉音類

C-1：k-

江蘇省から南方の湖南省、広東省、広西壮族自治区にかけて広域的に分布する。

C-2：g-

主に江蘇省の長江河口の付近にまとまって分布している。浙江省及び広東省中部にも点在している。

C-3：h-

福建省西南部の二地点にみられる。

D. 零声母類

D-1：i-

福建省及び江西省北部に集中して分布するほか、湖南省にややまとまった分布がみられる。また、江蘇省、浙江省、広東省東部、広西壮族自治区、台湾客家語地域にもそれぞれ少数分布している。

D-2：a-

湖南省、江西省、広西壮族自治区に少数分布している。

D-3：ε-

江西省、広東省東部、広西壮族自治区に少数分布している。

D-4：u-

湖南省の二地点にみられる。

E. 舌歯音類

E-1：t-

牙喉音類（k-）及び零声母類(i-)を取り囲んで、湖北省東部、湖南省北部・西部、広東省北部、江西省中南部などに周圏的に分布するほか、広東省中部、広西壮族自治区東部、福建省などにも分布する。また、少数だが、北方の山東省、山西省などにも分布している。

E-2：d-

江蘇省、浙江省、江西省北部に少数見られる。

E-3：tʂ-

長江以北に広く分布しており、頻度が高い。

E-4：ts/tʃ/tɕ/z/dʑ-

北方にも南方にも広く分布するが、多くは tʂ-と ts-(又は tʃ-)の音韻的区別が失われた地域であり、E-3 類の音声的変種と見なすことができる。

2）遠称

A. N 音類

A-1：n-/ ɲ-

東南地域を除く広い地域に分布する。また東南地域でも、湖南省、広西壮族自治区及び江西省北部などにややまとまった分布がみられる。

A-2：l-

長江沿いの江蘇省、安徽省、湖北省、貴州省、雲南省に現れることが多く、これらの地域は l-と n-の音韻的区別が失われていることから、A-1 類の音声的変種が多いと考えられる。湖南省では A-1 と混在して全省に分布している。この他、

北方の陝西省、甘粛省、南方の広西壮族自治区にも点在している。

B. 唇音類

B-1：P-

浙江省、湖北省、湖南省、江西省南部、広東省北部に少数分布している。

B-2：m-

浙江省北部と安徽省南部にまとまって分布するほか、西南の湖南省、江西省にも分布している。

C. 牙喉音類

C-1：k-

東南地域の主要形式であり、長江下流域を起点として浙江省、江西省、湖南省、福建省、広東省、広西壮族自治区などに広く分布している。

C-2：g-

浙江省、福建省に少数分布している。

C-3：ŋ-

湖北省、江西省北部、湖南省に少数分布している。

C-4：h/x-

福建省、江西省に集中して分布している。浙江省、河北省にも現れる。

D. 零声母類

D-1：i-

江蘇省、浙江省、安徽省南部、江西省東部、福建省北部、広東省中部、四川省に少数点在している。

D-2：a-

雲南省、貴州省、広西壮族自治区、広東省に分布している。江西省と湖南省にも少数現れる。

D-3：ɛ-

長江河口にまとまって分布しており、少し離れて江西省東部にも分布している。

D-4：o-

福建省北部と湖南省北部に少数分布している。

D-5：e-

江西省及び湖南省南部に点在している。

E. 「兀」類

E-1：v-

北方では山西省にまとまって分布し、そこから分布地域は陝西省、甘粛省に伸びる。南方では福建省北部・西部に分布地点がある。

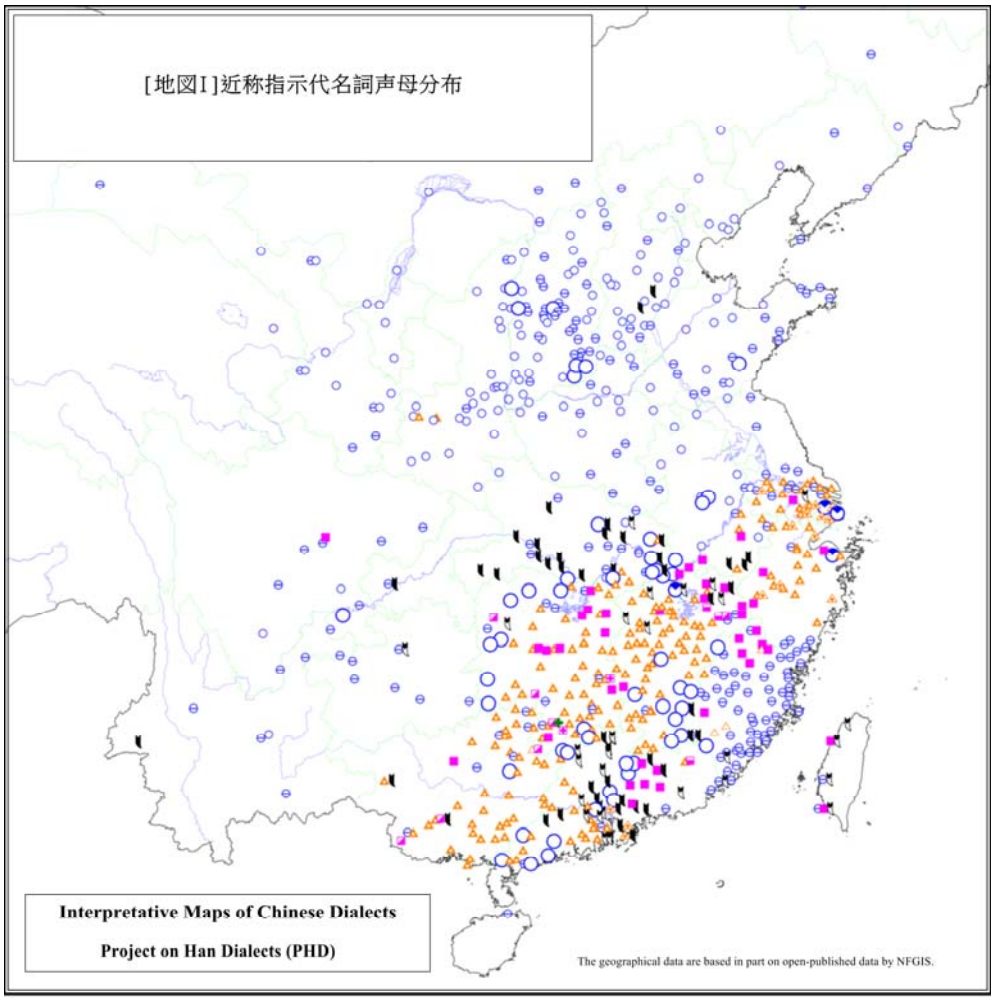
E-2：u-

北方では主に山西省と陝西省に分布している。南方では安徽省南部から湖北省、江西省の省境付近にまとまって分布するほか、福建省北部に集中的に分布している。その他、江蘇省、福建省南部、広東省、広西壮族自治区にも現れる。

E-3：ʔu-

江蘇省に 1 地点見られる。

以上、E 類は声母だけに着目して分類したが、各形式がすべて同じ語源「兀」に遡るかどうか、音韻対応の面で検討の余地がある。まず声母については、中古の微母(*m＞mv＞v)と影母(*ʔ>∅)の区別を保存する方言で v-で発音される傾向がある。しかし、微母と影母の区別を有する方言でも、u-で発音されることがあり、特に福建省では u-が多い。次に、声調は入声を有する福建省、江西省、山西省の方言ではほとんど入声（陰入）であるが、北方の入声を失った方言では、入声由来とは断定できない不規則な対応が見られる。「兀」類の語源とその変化については今後の課題としたい。



近称 (這個)

A.N音類

- A-1: n/ȵ-
- A-2: l-

B.唇音類

- p

C.牙喉音類

- C-1: k-
- C-2: g-
- C-3: h-

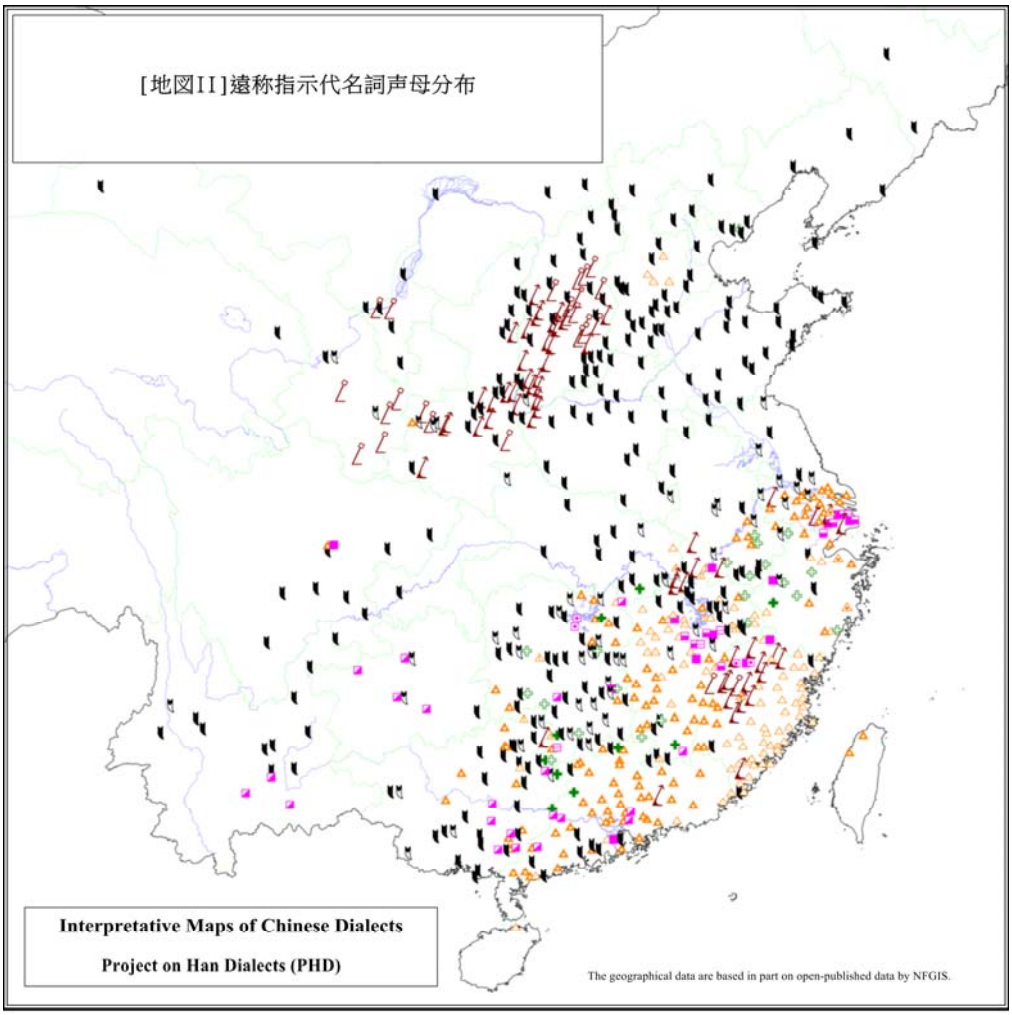
D.零声母類

- D-1: i-
- D-2: a-
- D-3:ɛ-
- D-4: u-

E.舌歯音類

- E-1: t-
- E-2: d-
- E-3: tʂ-
- E-4: ts/tʃ/tɕ/z/dʑ

地図 I



遠称 (那個)

A.N 音類

- A-1: n/ȵ-
- A-2: l-

B. 唇音類

- B-1: p-
- B-2: m-

C. 牙喉音類

- C-1: k-
- C-2: g-
- C-3:ŋ-
- C-4: h/x-

D. 零声母類

- D-1: i-
- D-2: a-
- D-3:ɛ-
- D-4: o-
- D-5: e-

E.「 兀 」 音類

- E-1: v-
- E-2: u-
- E-3:ʔu-

地図 II

1.3　地理的分布の解釈

漢語方言の地理的分布は南北対立を基軸としながら、西南地域（四川省、貴州省、雲南省）は北方と一致する特徴を示すことが多いことが知られている（岩田 2009: 13-19）。換言すれば、東南地域に分布する非官話方言群が北方及び西南地域に分布する官話方言と対立している。指示代名詞の分布も基本的にはこれと一致する。

北方方言は均質であり、大体「近称―遠称：這―那」という類型が分布している。ただし、遠称では山西省や陝西省に「兀」類が分布しているのが注目される。この「兀」類が福建省の北部にもまとまって分布し、他の類型を挟んで、遠隔分布（ABA 分布）を形成している。このような分布を見せる語形は一般的に古いと考えられるが、解釈には慎重を要する。「兀」類の分布については別稿を期すこととしたい。これに対して南方（東南方言）にはかなり複雑な分布が見られる。このため、本章では、主に南方方言を中心に論じ、その歴史的変遷を明らかにする。

近称の形式を示した〔地図 I〕では、長江以北の広い範囲で舌歯音類の E-3（そり舌音）、E-4 類（破擦音、摩擦音）が分布している。福建省に舌歯音類の E-4 類（破擦音、摩擦音）が分布しており、北方のそれと遠隔分布を形成している。舌歯音類のうち、破裂音声母（E-1:t-、E-2:d-）は、上述のように、牙喉音類（C 類）及び零声母類（主に D-1 類）を取り囲んで、湖北省東部、湖南省北部・西部、広東省北部、江西省中南部などに周圏的に分布している（地図上では大きな○で示した）。中国全体としてみても、舌歯音類は牙喉音類を取り囲んで分布する傾向がある。このことから、近称としては、舌歯音類が古く、その後、舌歯音類＞牙喉音類の変化が起きたと考えられる。

遠称の形式を示した〔地図 II〕では、N 音類（A 類）が北方及び西南地域、即ち官話地域に分布している。一方、東南地域では、牙喉音類が広く分布している。その牙喉音類は二種類に分けることができる。

1) k/g 声母類：江蘇省、湖南省から広東省にかけて分布。

2) h/x 声母類：福建省、江西省周辺に分布。

湖南省、広西壮族自治区及び江西省北部などには N 音類の分布が見られるが、これは北方方言の侵入を語るのであろう。このほか、唇音類は分布地点が少ないが、分布範囲が広く、浙江省、湖南省、江西省及び北方地域の少数地点に散在している。

1.4　指示代名詞の類型地図——文献資料との対照を兼ねて

前節で、〔地図 I〕により、近称の古い類型は舌歯音類であると推定した。しかし、遠称の〔地図 II〕では、N 音類、牙喉音類及び唇音類の新古関係、変化の過程を推定することができない。そこで、以下では方言から得られた情報を文献資料による情報と対照し、さらに「近称—遠称」の類型を示す〔地図 III〕を作成することによって、指示代名詞の歴史的変遷を考察する。

第二章で論じた文献資料によれば、上古の指示代名詞は、近称が舌歯音類の「之」「茲」「此」「斯」「是」、遠称が牙喉音類の「其」及び唇音類の「彼」、「夫」であった。このほか、N 音類の「若」と「爾」がある。上古の「若」「爾」については、前章で述べたように、近称なのか遠称なのか論争がある。しかし、中古以後、N 音類の「爾」が遠称として使われる頻度が高くなり、のちに「那」も現れ、N 音類の遠称は中古以後の主流になった。

一方、文献における「彼」など唇音類の遠称は、中古以後、使用が文語に限定されるようになった。現代方言にも唇音類の遠称が現れるが、地点数が少なく、分布地域もまとまっていない。これは口語における勢力の衰退を物語るのであろう。

中古時代には、「底」「箇」「阿堵」などの新たな指示代名詞が現れた。「底」は近称として用いられ、「箇」は近称、遠称いずれでも用いられる（鄧軍 2008：210-211）。筆者の文献調査では「底」「箇」が現れないが、呂叔湘（1985）はこの二つの指示代名詞は六朝から現れ、主に唐宋時期の詩詞に現れると指摘している。上古の「之」「茲」「此」

「斯」「是」の声母は精組または章組であり、中古の「底」「堵」の声母は端組である。従って、両者は同源関係にあるとは断言できない。〔地図 I〕に示した舌歯音類の近称は、破擦音（tʂ/ts/tɕ/tʃ）、摩擦音（z）、破裂音（t/d）を声母とする。その中で、破裂音類（t）は、声調は上声である地点がいくつもある。具体的な音声形式については、下文に掲げる表 8「広東省「T－K」類方言資料」を参照されたい。このことから、破裂音類（t）は中古の「底」に由來する可能性がある。破擦音類については、少なくともそれらの一部は上古の「之」「茲」「此」「斯」「是」に由来する可能性がある。

〔地図 II〕に示した牙喉音類の遠称には、破裂音（k/g）、摩擦音（h/x）、鼻音（ŋ）があり、そのうち少なくとも破裂音（k/g）は、上古の「其」又は中古の「箇」に由来すると考えられる。つまり、東南地域に分布する牙喉音類の遠称は、その多くが上古から継承・保存されたものである。これに対して、北方に分布する N 音類の遠称は、中古以後、それが勢力を拡大したことを反映する。遠称の〔地図 II〕に現れた牙喉音類と N 音類の南北対立は、このような南方における古形式の保存と北方における新形式の拡散を反映していると考えられる。

文献と参照した上で、さらに南方方言における指示代名詞の歴史的変遷を明らかにするため、語彙体系「近称—遠称」の類型を示す〔地図 III〕を作成した。〔地図 III〕では、まず近称の第一成分の声母を五大類に分類した。A 大類は「近称の舌歯音 TS」類である。この類型は舌歯音の破擦音及び摩擦音を含む。凡例では略号 TS と表示する。B 大類は「近称の舌歯音 T 類」である。この類型は舌歯音の破裂音を含み、凡例の略号は T である。C 大類は「近称の N 音類」である。この類型は n/ɲ/l 声母を含み、略号は N である。D 大類は「近称の牙喉音類」であり、略号は K である。E 大類は「零声母類」であり、略号は∅である。凡例の大類名の後の（　）内に声母を示す。例えば、A 大類の後の（tɕ/tʃ/tʂ/ts/dʑ/z）は、この大類の近称声母に tɕ/tʃ/tʂ/ts/dʑ/z があることを表す。近称の声母によって帰納した五大類をさらに遠称の声母によって小類に分類した。遠称

の分類及び記号の使用方法は近称に準じて、「N 音類」（略号 N）、牙音類（略号 K）、喉音類（略号 H）、「兀」類（略号 U）及び「その他」の五類とした。遠称の分類は、牙喉音類を牙音類と喉音類に分けた。それは牙音類と喉音類の地点頻度がいずれも高いためである（150 地点と 91 地点）。近称の牙喉音類では、牙音類が多く、喉音類が少ないため（213 地点と 4 地点）、牙喉音類として一括した。遠称の「その他」類には、舌歯音 TS 類、舌歯音 T 類、唇音 P 類、零声母∅類がある。これら 4 類の遠称は地点数が少ないため、「その他」類としてまとめた。

以下、例えば、「A-1：TS－N」は類型「近称舌歯音類 TS 類－遠称 N 音類」を示す。現代の北京語「這－那」の「tʂ-n」は A-1 類に属する。次に各類型の分布状況を説明する。

A. 近称舌歯音類 TS(tɕ/tʃ/tʂ/ts/dʑ/z)－遠称音類

A-1：TS－N

長江以北の地域に広く分布している。また、江蘇省から、長江沿いに安徽省、湖北省、湖南省、貴州省、四川省、雲南省まで分布している。江西省、広西壮族自治区にも数地点が現れる。

A-2-1：TS－K

江蘇省の長江河口の付近に分布している。そのほか、陝西省、安徽省、福建省西部、湖南省の少数地点に現れる。

A-2-2：TS－H

福建省から広東省東部にかけての閩語地域に集中して分布している。

A-3：TS－U

山西省から陝西省中部、甘粛省にかけて連続的に分布している。また、福建省北部にまとまって分布している。江蘇省にも一地点が現れる。

A-4：TS－その他

貴州省、四川省、江西省に点在している。

B. 近称舌歯音類 T(t/d)－遠称音類

B-1：T－N

山西省、安徽省、湖北省、湖南省などに見られるが、分布は散在している。

B-2：T－K

主に江西省南部、広東省中西部に分布しており、浙江省、湖北省東部、福建省北部、湖南省西部、広西壮族自治区、四川省にも少数分布している。

B-3：T－U

山西省、湖北省、福建省北部などに点在する。

B-4：T－その他

長江河口、江西省南部、福建省南部、広東省などに点在する。

C. 近称 N 音類 (n/ɲ/l)－遠称音類

C-1：N－N

長江中流域から川沿いに安徽省、湖北省、四川省、貴州省、広西壮族自治区西部、雲南省まで分布している。北方の河北省にも見られる。

C-2-1：N－K

主に広東省中部に集中して分布している。江蘇省、福建省西南、江西省、湖南省、台湾客家語地域にも分布している。

C-2-2：N－H

江西省に現れる。

C-3：：N－U

福建省南部、江西省北部に現れる。

D. 近称牙喉音類 K(k/g/h)－遠称音類

D-1：K－N

湖南省全域に分布しており、広西壮族自治区にも多く分布している。そのほか、陝西省、江蘇省、浙江省、安徽省、江西省、広東省中西部に分布している。

D-2-1：K－K

江蘇省長江河口及び浙江省から、西南へ伸びて、江西省、湖南省、広東省、広西壮族自治区に分布している。

D-2-2：K－H

江西省にまとまって分布しており、福建省と浙江省にも点在している。

D-3：K－U

江蘇省、陝西省、福建省、広西壮族自治区に点在している。

D-4：K－その他

D-2-1：K－K とほぼ同じ地域に分布している。

E. 近称零声母音類∅－遠称音類

E-1:∅－N

江西省、湖南省、広東省、広西壮族自治区に点在している。

E-2-1:∅－K

広東省東部に集中して分布するほか、江蘇省、浙江省、江西省、湖南省、福建省、四川省に点在している。

E-2-2: ∅－H

浙江省と江西省の境界付近に分布している。

E-3: ∅－その他

浙江省西部、安徽省南部、湖南省、福建省北部、四川省に分布地点がみられる。

〔地図 III〕に現れた北方方言の類型は単純であり、晋語地域の「A-3：TS－U」類以外の地域はほとんど「A-1：TS－N」類である。

「C-1：N－N」類は長江中流域を中心に線条的に分布している。この地域では近称と遠称の音声が同じ地点もある。

湖北省黄陂県祈家湾鎮：近称、遠称とも［nie^{上}］（《湖北方言調査報告》）

湖北省安陸県：　近称［niɛ^{陰上} ko^{軽声}］、遠称［niɛ^{陽上}ko^{軽声}］（《安陸方言研究》）

これらの方言では近称は遠称に類推して N 音類になったと考えられる。但し、同音にならなかった方言もある。

安徽省黟县宏村：近称 [nɛi^{陽去}ka^{陰平}]、遠称[noɐ^{陽去}ka^{陰去}]《黟县宏村方言》

ここでは同音衝突が回避されたと見なすことができる。

一方、南方地域には、かなり複雑な分布が見られる。南方方言では、重要な類型として、以下の数類がある。

A-2-1：TS－K　　A-2-2：TS－H

B-2-1：T－K　　（T－H 無し）

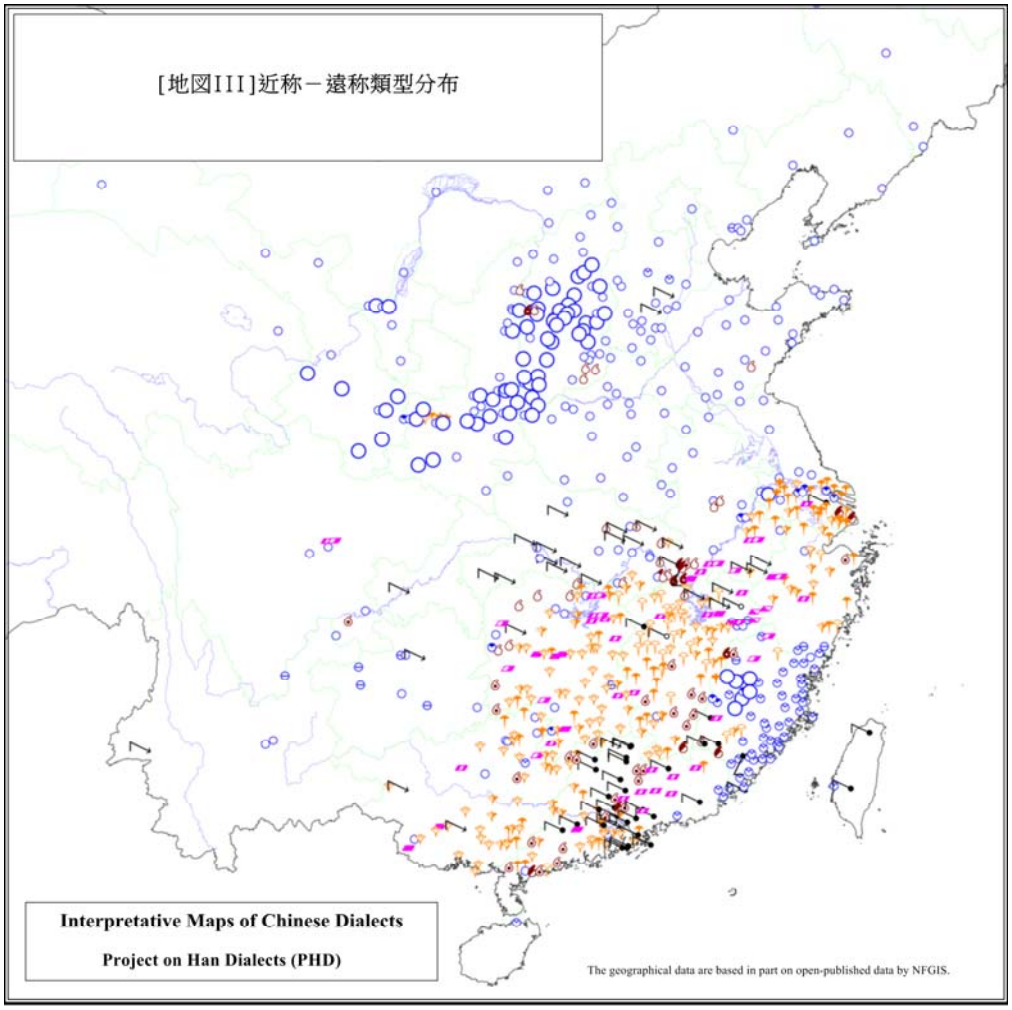
C-2-1：N－K　　（C-2-2：N－H は地点数が少ない）

D-1：K－N

D-2-1：K－K　　K-2-2：K－H

E-2-1：∅－K　　（E-2-1：∅－H は地点数が少ない）

以下にこれらの類型の分布状況から、南方方言の指示代名詞の変遷を推定する。



A.近称舌歯音類 **TS(tɕ/tʃ/tʂ/ts/dʑ/z)** -遠称音類

- A-1:TS-N(n/ȵ/l)
- A-2-1:TS-K(g/k/ŋ)
- A-2-2:TS-H(x/h)
- A-3: TS-U(v/u)
- A-4: TS-その 他 (∅/TS/P)

B.近称舌歯音類 **T(t/d)** -遠称音類

- B-1:T-N(n/ȵ/l)
- B-2-1:T-K(k/ŋ)
- B-3: T-U(u)
- B-4: T-その 他 (∅/T/TS)

C.近称 **N** 音類 **(n/ȵ/l)**-遠称音類

- C-1:N-N(n/ȵ/l)
- C-2-1:N-K(k)
- C-2-2:N-H(x/h)
- C-3: N-U(u)

D.近称牙喉音類 **K(k/g/h)** -遠称音類

- D-1:K-N(n/ȵ/l)
- D-2-1:K-K(g/k/ŋ)
- D-2-2:K-H(x/h)
- D-3:K-U(v/u)
- D-4:K-その 他 (∅/T/TS/P)

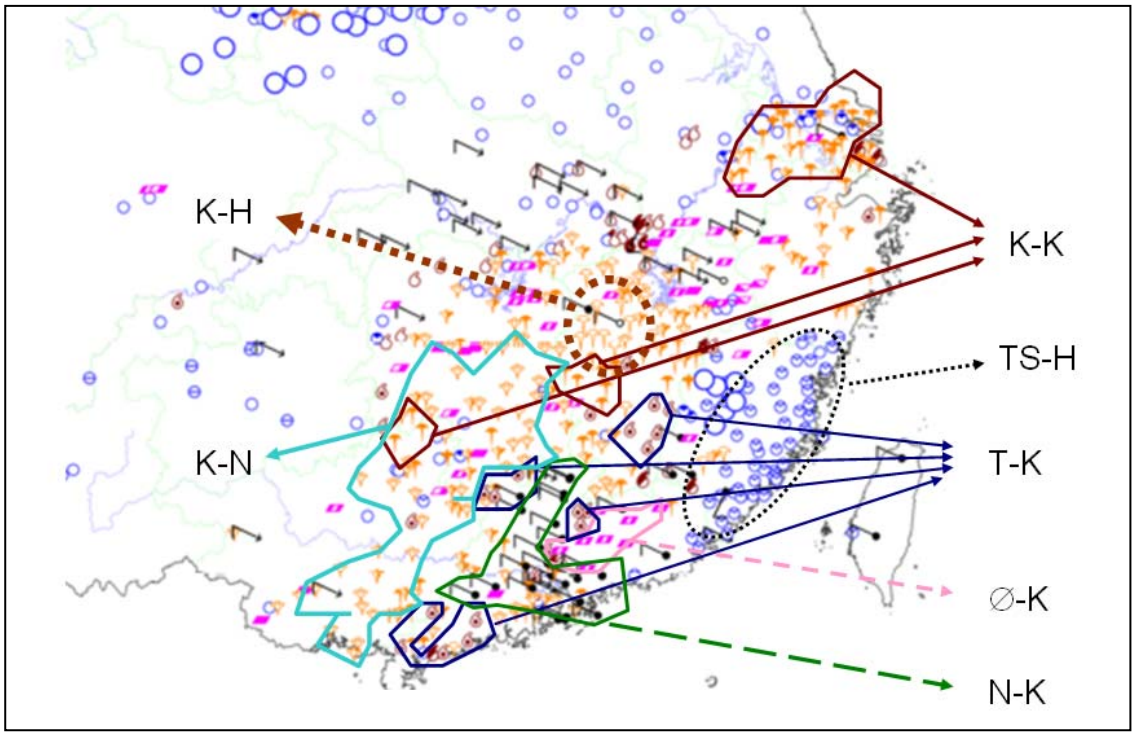
E.近称零声母音類 ∅ -遠称音類

- E-1:∅ -N(n/l)
- E-2-1:∅ -K(k/ŋ)
- E-2-2:∅ -H(x)
- E-3:∅ -その 他 (∅/T/TS/P)

地図 III

この分布状況を文献と対照すれば、南方方言における最も古い類型は「TS－K」（e.g 此/茲/是/斯－其/箇）または「T－K」（e.g 之/底－其/箇）であり、他の類型はこの二つから変化したものと考えられる。福建省には「TS－H」類型がまとまって分布しており、江西省北部及び中部には「K－H」類型が集中して分布している。この二つの類型は隣接して分布している。文献と対照すると、ここに分布する「H」は六朝期に現れた「許」に由來すると考えられる。[13]

「K－N」類型は「K－K」類型に由来し、後に北方の「TS－N」類型の影響を受けて、「K－N」類型になったと推定される。このような方言接触の影響は次の節でまとめて論じる。残りの三つの類型は「N－K」、「K－K」、「∅－K」である。南方方言の類型の分布をわかりやすくするため、以下の〔地図 IV〕を作成した。



地図 IV

[13] 柳士鎮（1992：171）は、魏晋南北朝の「許」は主に南朝の民歌に現れ、地域的特徴が強い方言形であると述べている。

地図 IV には主要な類型のみを表示した。

我々が類型の新古関係を推定する根拠は、主に地図に現れる「周圏分布」及び「隣接分布」である。前述の通り、周圏分布で外縁地域にある語形は一般的に古い語形と考えられている。また、語形 A と B が隣接分布する場合、その変化の過程は A＞B または B＞A である。

ここで、「N－K」、「K－K」、「∅－K」類型の成立過程を明らかにするため、まず南方地域に遠隔分布している「T－K」と「K－K」に着目しよう。前に述べたように、文献と対照すれば、「T－K」は「K－K」より古い類型と考えられる。つまり、南方地域では次の変化が起きたことになる：

推定 1：T－K/TS－K　＞　K－K

次に〔地図 IV〕では、広東省内に主に三つの類型がみられる。それは東部の「∅－K」、中部の「N－K」、西部の「T－K」である。ここで注目されるのは、東部の「∅－K」と西部の「T－K」の韻母に音声的な類似性が見られることである。表 7 及び表 8 を参照されたい。

表 7　広東省「∅－K」類方言資料

地点名	近称第一成分（指示詞）		遠称第一成分（指示詞）	
	声母韻母	声調	声母韻母	声調
梅県	ɛi	上	kɛi	去
従化県	ɐi	陰去	kɔi	陰去
河源県	it	陰入	kuɔi	陰去
紫金県	i	上	kɔi	陰去
龍門県	i	陰去	kɔi	陰去
龍川県陀城	it	去	kuɔi	去
連平県忠信	i	上	kɔi	去

表 8　広東省「T－K」類方言資料

地点	近称第一成分（指示詞）		遠称第一成分（指示詞）	
	声母韻母	声調	声母韻母	声調
増城県	ti	上	kai	去
			ai	去
廉江県青平鎮	ti	上	kai	去
電白県沙琅郷	ti	上	kai	去
陽西県塘口郷	ti	上	kai	去
連県保安鎮	tei	上	ki	陰平
連県西岸鎮	təi	上	ke	陽去
新豊県大席	ti	上	kuɔi	陰平

＊方言資料の出所は本文末の〈第三章の表 7、表 8 で使用した方言資料〉を参照。

表 7 の紫金県、龍門県、連平県忠信の[i]と表 8 の増城県、廉江県青平鎮、電白県沙琅郷、陽西県塘口郷、新豊県大席の[ti]は韻母が同じである。表 7 の梅県の[εi]と表 8 の連県保安鎮の[tei]は韻母の発音が類似している。このような韻母の相似性から、零声母の近称は[t]声母が脱落した形式ではないかと考えられる。この推定は〔地図 IV〕における分布に拠って補強できる。「T－K」類型は 4 カ所（紺色の地域）に見られるが、そのうち広東省中北部の 3 地点（新豐、翁源、連平）は「∅－K」類型（ピンク色によって示した）と隣接して分布している。因って、隣接分布の原則によって「T－K」＞「∅－K」と推定できる。この推定に上の「推定 1 」を組み合わせて「推定 2」とする。

推定 2：T－K / K－K　＞　∅－K

次に、「∅－K」（ピンク色）と「T－K」（紺色）は「N－K」（緑色）によって分断されているように見える。この分布から、「N－K」は「T－K」及び「∅－K」より新しい類型と推定できる。[14] この推定に上の「推定 2」を組み合わせて「推定 3」とする。

推定 3：T－K / K－K / ∅－K　＞　N－K

以上の変化がなぜ起きたか、次節ではそれらの原因について論じる。

2.　南方方言における指示代名詞の変化の要因

南方方言の指示代名詞は類型が複雑であり、前節では各類型の分布状況に基づいて、

[14] 広東省の近称の N について、現在では様々な説がある。詹伯慧（2002：45）は、「広州話の近称“呢”ni55 はチワン族の言語から借用された。漢語の古代文献の字書、韻書、経典などでは、どれにも発音が ni55 に近い近称が現れていない」と述べている（原文は中国語、訳は筆者）。張恵英（2000）は、侗台語の近称及び広東語の近称の語源が同じく漢語の二人称代名詞“你”であると指摘し、他の少数民族語についても指示代名詞が二人称代名詞に由來する例を挙げている。
これらの説について、筆者は、広東語の近称が少数民族の言語に由來するのであれば、なぜ代名詞の系統で近称のみ受け入れたのかを説明せねばならないと考える。張恵英（2000）は、漢語の二人称代名詞とチワン族の近称の発音が似ており、この接点から、漢語代名詞の系統で、二人称代名詞を指示代名詞として転用したと述べている。張氏の解釈は、近称のみを受け入れた原因を説明できそうだが、第二章で検討したように、漢語内部の歴史においても、二人称代名詞と指示代名詞が兼用される例、即ち N 音類の「爾」であった。広東省における N 音類近称は少数民族の言語の影響とは断言できないと考えられる。本稿では、地図の分布により少なくとも「N－K」は「T－K」より新しいと判断する。

その歴史的変遷を推定した。本節では変化の要因について論じることにする。

2.1　古形式の保存――「TS－K」及び「T－K」

「TS－K」及び「T－K」は上古以来の古形式の保存であると推定する。前節（1.4）で述べたように、これら古形式が残存する方言は南方でもそれほど多くはない。「T－K」は江西省南部、広東省中西部の 4 カ所にそれぞれまとまって分布しているが（[地図 IV] 参照）、「TS－K」は江蘇省の長江河口付近や福建省西部、湖南省などに少数みられるだけである。

2.2　定（definite）を表す「指示詞＋数詞＋量詞＋名詞」構文の文法化

本節では、「推定 1　：T－K/TS－K＞K－K」及び「推定 2：T－K＞∅－K」の根拠を述べる。結論的に言えば、それは量詞または数詞が指示代名詞に変化した結果と考えられる。

前節（1.4）で、六朝期に「箇」が指示代名詞として用いられ、遠称、近称いずれでも用いられたことを指摘したが、この「箇」は量詞に由来するもので、六朝期にすでに指示代名詞として用いられるようになったと考えられる。これは所謂“文法化”の現象であり、そのような変化は現代の南方方言でも進行中である。以下、「箇」は「個」と表記する。

現代の南方方言で量詞ばかりでなく、数詞も指示代名詞に変化している。これは「T－K＞∅－K」という変化の成因であろう。量詞や数詞が指示代名詞に変化するのは、定（definite）を表わす「指示詞＋数詞＋量詞＋名詞」構文に起因すると考えられる。このような文法化は南方方言の特徴と思われる。以下では方言の具体例を取り上げ、文法化の過程及びその影響を説明する。

2.2.1　南方方言の「定」を表す指示詞、数詞、量詞

量詞が指示代名詞に変化する現象は、趙日新（1999）、石毓智（2001、2002）、汪化云（2008）が言及している。ここでは、石毓智（2002）の例を取り上げよう。

(1)　a.義烏：個表児準極　（この腕時計は非常に正確です）

b.上海：本書撥我　（この本を私にください）

例（1）の“個”、“本”は元々量詞であり、ここに指示代名詞として使われている。

数詞が指示代名詞として使われる例は、閩語、客家語、呉語に見られる。張恵英（1994）は閩北の建陽、崇安地方の方言に「一」[i 入]を指示代名詞として用いられる例を挙げている。（漢字が特定できない語形は□で表示）

(2)　a. 建陽：□□[i 入 tsia 入]　（これ）

b. 崇安：□事[i 入 hai 上]　（これ）

同書では、張恵英は閩南地域に広く分布する近称代名詞「即」[tsit]も数詞「一」に由來する可能性があると述べている。[15]

練春招等（2010）は、河源客家語の近称代名詞として用いら入れる「一」の例を挙げている。

(3) a.一隻[it 陰入 tsak 陰入]　（これ）

b.一件衫你試下哩　（この服を着てみなさい）

蘇州方言の数詞「両」も指示代名詞として使われる。例（4）は石汝杰（1985）の例である。蘇州方言の「両」は特殊な変調によって指示代名詞の複数の意味を表す。（例

[15] 張恵英（1994）が挙げる閩南地域の近称「即」[tsit]は、本論文の「TS－H」類の分布地域内にある。この「TS－H」類の「TS」は一部が舒声韻であり、一部は入声韻である。舒声韻のほうは「此」などの舌歯音に由来するだろうが、入声韻は、数詞「一」または量詞「隻」[tsak]が文法化したものと考える。廈門の閩南語は「一」は文白両読である。白読は[tsit]であり、文読は[it]である。また、閩南語では「TS－H」類の「H」は一部も入声韻である。例えば、廈門の閩南語は[hit]である。前述のように、この「H」は六朝期に現れた「許」に由来すると考えられるが、「許」は舒声韻（暁母遇摂開口三等上声）であり、入声韻ではない。この点について、この地域の入声韻「H」はおそらく「一」に由来する近称形式[tsit] 、[it]などの影響を受け、それに類推し、同じく入声韻になったと考える。

（4）では「|」の前の数字が本調調値、「|」の後の数字が変調調値を示す。）

(4) a.$\boxed{\text{両}}$日天　[liã$^{31|55}$ iə$^{23|55}$ t^{h}i$^{44|21}$]　（この/その数日間）

b.$\boxed{\text{両}}$日天　[liã$^{31|35}$ iə$^{23|55}$ t^{h}i$^{44|21}$]　（二日間）

陳鴻邁（1991）は、閩語海口方言の複数を表す量詞「多」は指示代名詞複数として使われると述べている。さらに、本調と変調によって近称、遠称を分化させるという。

(5) 多放房裡　（これら（本調）/それら（変調）を部屋に置いてください。）

以上の例から、元々指示の機能がないはずの数詞、量詞は南方方言で指示代名詞として用いられることが分かる。漢語では指示詞、数詞、量詞で名詞を修飾することは基本的には「指示詞＋数詞＋量詞＋名詞」という統語構造であり、その指示詞は定を表す機能を担っており、この構文に修飾された名詞は定である。何故指示詞がなくても、定を表せるのだろう？それはおそらくこの「指示詞＋数詞＋量詞＋名詞」構文の文法化であると考えられる。指示詞は話者の主観の距離感を表し、物事を指す語である。話者が指示対象の存在を確信するという前提の下で、指し示すのである。したがって、指示詞があることで、「定」（definite）も表される。「指示詞＋数詞＋量詞＋名詞」構文は指示詞があることで定を表す構文である。この構文の構成する四つの成分は定を表す以外に各々が機能を有している。

指示詞：話者が指示中心として、主観の距離感を表し、物事を指す。

数詞：指す対象の数を表す。

量詞：指す対象の種類や形状などを表す。

名詞：指す対象。

話者が物事を指す場合、定を表した上で、他の何かの情報を伝えるかは話者が決めることができる。数、種類や形状などはまったく言わなくても構わない。数だけ伝えるなら、量詞がなくてもいい。この場合は「指示詞＋数詞＋名詞」構文になる。種類や形状だけを伝えるならば、「指示詞＋量詞＋名詞」構文を使う。数詞、量詞とも必要ない場

合は「指示詞＋名詞」構文だけでよい。例えば、北京語では「這一個人」「這個人」「這一人」「這人」であり、話者の都合よりどれかを使う。しかし、この構文で最も重要なのは「定」を表せる指示詞である。南方方言の例では、指示詞がなくても、「定」を表せる。これは何故だろうか？石毓智（2002）は量詞が指示代名詞として使われる現象について、「結構賦義」（構造が意味を与える）と説明している。主語の位置にある語は一般的に定である。量詞だけがある「量詞＋名詞」構文は主語の位置にあれば、定になる。つまり、指示詞がなくても、主語の統語位置から定の意味を得ることである。しかしながら、方言資料では、目的語の位置にも指示詞がない例も見られる。[16]　漢語では、目的語にある語は指示詞がなければ一般に「不定」の例が多いが、南方方言では目的語の位置から「定」の意味を得たと言えるのではないだろうか。

筆者は、主語の位置に立つ「指示詞＋数詞＋量詞＋名詞」構文では、定を表す機能が既に固定されていると考える。つまり、構文全体の意味が固定され、指示詞がなくても定を表すことができる。こうして、何回も使われるうちに、この構文の第二成分（数詞）か第三成分（量詞）か指示詞であるかのように認知されるようになった。そして、最後は文法化し、この構文で元々第二成分又は第三成分であった要素が指示詞になった。例えば、上記例文（3）の河源客家語で、「一」は近称の指示代名詞になっている。

2.2.2　「定」の表示法：南方方言と北方方言の指示類型

前節で南方方言は、数詞、量詞などの非指示代名詞も「定」を表しうることを論じた。本節では、先行研究に拠って、非指示代名詞も「定」を表す現象は南方方言の特徴であ

---

[16] 周小兵（1997）は、広州語で指示詞として使われる量詞が目的語の位置にある例を挙げている。

好聲啲呀，條石梯好企，你蠻實條鐵練呀。

（気をつけて、この階段は高い、君この縄をしっかりつかまえろう）

陳興偉（1992）は義烏方言の例を挙げている。

阿住間屋

（私はこの部屋に住んでいる）

ることを説明する。

曹志耘（2008）主編の《漢語方言地図集》語法巻〈地図 14 量詞定指〉によれば、量詞が指示代名詞として「定」を表すことができる方言の分布地域は南方にある。また、王洪鍾（2011）は、19 個の省、市、自治区、合計 72 地点の指示類型を提示している。下表は筆者が王洪鍾氏の資料をまとめたものである。表に現れる太い線の左側は指示詞型であり、右側は非指示詞型である。太い線の上側は北方方言であり、下側は南方方言（東南方言）である。

表 9　漢語方言の指示類型（王洪鍾（2011：229）により、筆者まとめ）

指示類型 / 方言	指示詞型	量詞型	数詞型
官話	29		
晋語	34		
呉語		6	5
湘、徽語		3	
閩語	5	5	
粤、贛、客語		3	
平話		1	

この表から、北方方言（官話、晋語）では「定」が全て指示詞で表され、南方方言では定が主に非指示代名詞の量詞、数詞で表されることが分かる。

南方方言の指示代名詞の類型は北方方言より複雑である。その一つの原因は、前節で論証したように、「指示詞＋数詞＋量詞＋名詞」構文における非指示代名詞の文法化にであると考えられる。

2.2.3　文法化後の指示代名詞の変化

南方方言に起きた文法化は指示代名詞の類型が複雑化した要因である。しかし、文法

化は変化の最終結果ではなかった。量詞または数詞から変化した指示代名詞はさらに新しい変化を生んだ。

竹越（2005，2012a.b）及び張洪年（2006）は、19 世紀から 20 世紀初に広東省の西洋人が書いた広東語教科書から、量詞に由来する遠称「個」の声調の変化の過程を発見した。それは、文法化され、遠称になった広東語の「個」が文法化され、その後一世紀の間に、声調が陰去＞陰上＞陽上と変化したことである。文法化後の「個」が同時に量詞の「個」と指示詞の「個」が二つの意味を持ち、いわゆる“同音衝突”状態になった。その同音衝突を避け、二つの意味を分けるため、遠称「個」の声調が変化を起こしたのである。

筆者が収集した方言資料にも「一」から変化した指示代名詞の影響を受け、声調が変化した痕跡が見られる。本章 1.4 の表 7 に示した“広東省「∅－K」類近称第一成分”の声調を見ればわかるように、同じ∅声母の近称でも声調は一定しない。一方、表 8 の“広東省「T－K」類方言資料”では、近称 T 類の第一成分の声調がすべて上声である。表 7 では、近称∅類の声調が上声である地点として、梅県、紫金県、連平県忠信がある。この三地点はおそらく、∅類の「一」が近称として用いられる近隣方言（同表の河源県など）の影響を受けて元々あった[t]声母が脱落したが、声調は元の上声のまま保存されたと推定される。これは「推定 2：T－K＞∅－K」の変化過程の一部である。

表 7 で非上声の近称が使われる地点は、従化県、龍門県、龍門県陀城であり、この三地点の近称と遠称の声調は同じである。これらの地点の近称はおそらくまず上述の梅県、紫金県、連平県忠信のように[t]声母が脱落した上で、声調は遠称に類推したと考えられる。このように近称と遠称が相互に影響することで語形が接近し、最終的に同音になる。これは一種の類推現象であり、同様の現象は人称代名詞にも起きることが指摘されている（李栄（1965）、候精一（2012））。表 7（「∅－K」類）の近称に見られる声調が不一致なのは、文法化の影響のほか、遠称との類推が起きたためでもある。

2.3　同音衝突の影響

竹越（2005，2012a.b）及び張洪年（2006）が指摘する広東語の例では、同音衝突も南方方言の指示代名詞に影響を与える要因の一つと考えられる。ここで筆者が収集した方言資料の例を取り上げて説明する。

表 10　江西省南部「K－K」類方言資料

地点名	近称第一成分（指示詞）		遠称第一成分（指示詞）	
	声母韻母	声調	声母韻母	声調
吉安市	koi	陽平	koi	上
上猶県	kai	陽平	kai	去
崇義県	kæ	陽平	kæʔ	陰入
泰和県	kɤ	陰平	kɤ	上
南城県	ko	陰平	kai	陰平
萬安県	kiai	陰平	kiai	陽平
広昌県	kɛi	上	kɛi	陰平

＊方言資料の出所は〈第三章　表 10 で使用した方言資料〉を参照

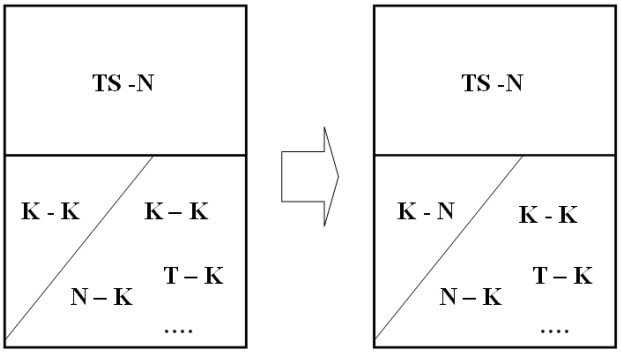
表 10 は〔地図 III〕に現れた江西省南部地域の「K－K」類である。表 10 から、近称と遠称が音声的に類似することが知られる。崇義県と南城県では近称と遠称の韻母が異なるが、他の地点では同じであり、主に声調によって区別されている。これは広東語のように量詞「個」が文法化した痕跡と考えられる。江西省の場合は、まず量詞「個」が文法化し、近称と遠称の間に類推が起こり、同音になった（又はなろうとした）。[17] し

[17] このような類推の例は前に述べた［地図 III］の「C-1：N－N」類にも見られる。その類型は長江中流域を中心に川沿いに線条的に分布している。例えば、上文 1.4 で紹介したように、湖北省安陸県では近称、遠称とも[niɛ 陰上 ko 軽声]である。一方、安徽省黟县宏村の近称 [nɛi 陽去 ka 陰平]

かし、そうすれば、近称と遠称が同音衝突になる。そこで、一部の方言は同音衝突を回避するため、音声変化を起こした。表 10 の江西省の場合は、声母の類型に変化はなかったが、同音衝突を回避するため、声調が変わったと考えられる。

2.4　方言接触の影響

前節までで論じた変化の成因は、いずれも方言の内部的現象である。本節では、南方方言に変化を起こした外因――方言接触を説明する。前述のように、六朝以来、量詞「箇」（個）が文法化したため、南方方言には「K－K」類の指示代名詞が広く分布するようになった。しかし南方地域の西北外縁には「K－N」類が分布している。その地域はおそらく北方方言の「TS－N」類と接触し、N 類遠称を受け入れたと考えられる。分布状況及び変化の過程を下図に示す。



この推定に基づき、「推定 1：T－K / TS－K＞K－K」を以下のように修正する。

推定 1（修正）：T－K / TS－K　＞　K－K　＞　K－N [18]

―遠称[noɐ 陽去 ka 陰去]の対立のように、同音衝突を回避したとみられる方言もある。

[18] 伍云姬（2008）は指示代名詞の声母類型の分布状況により、湖南省の指示代名詞の歴史変遷を推定している。①湖南省北部、中部、南部では、類型「舌根音近称－舌頭音遠称」（本稿の「K－N」類に相当）が分布している（伍氏の舌頭音は破裂音（t）、破擦音（ts）、接近音（l）、鼻音（n）を含む）；②近称と遠称とも舌根音である類型（ほぼ本稿の「K－K」類）が湖南省各地に点在する；③湖南省内の外縁地域には、少数の「舌頭音近称－舌根音遠称」（本稿の T－K 類に相当）が分布している。伍氏は、湖南省の基層類型を「K－K」類と仮定し、省の西北地域では

3. 第三章のまとめ

本章では、指示代名詞の第一成分の声母に基づいて地図を作成し、その分布状況により、最も古い指示代名詞の類型は「近称：舌歯音類－遠称：牙喉音類」であると推定した。さらに、最も古い類型の一つと推定される「T－K」類とその周辺の分布状況から、南方方言（東南方言）の指示代名詞は以下のように変化したと推定した。

（1）T－K / TS－K ＞ K－K ＞ K－N

（2）T－K / K－K ＞ ∅－K

（3）T－K / K－K / ∅－K ＞ N－K

本章の第 2 節はその変化の成因について筆者の解釈を示した。南方方言における指示代名詞の変化には、下記の要因が関与したと考えられる。

（1）文法化

（2）同音衝突

（3）方言接触

南方方言の内部では文法化が起こり、さらに同音衝突を避けるため、不規則的な音韻変化が起こった。一方、外部では強勢な北方方言の影響を受けた。そして、最終的に、中国東南地域に多彩な類型が錯綜した分布を形成するに至った。

北方外来方言の侵入により「K－N」類及び「T－K」類に変化した；「K－N」類の成立は遠称が侵食される速度が速かったためであり、「T－K」類の成立は近称が侵食される速度が速かったためであると解釈した。伍氏はさらに「T－K」類が湖南省の最外縁にあることより、「T－K」類はより新しい類型と判断した。つまり、伍氏は湖南省で K－K>K－N>T－K という変化が起きたと推定した。そのうち、K－K>K－N という推定は本稿と同じであるが、「T－K」類については、全国地図で近称の T 類が南方地域で周圏分布を示すことから、これが最も新しい類型であることはあり得ない。なお、伍氏が指摘した近称の舌頭音類の音声は、[tiɛn24][tiɛ13][tiɛ25][to24][tsɤ25][li25][tai55][ti21][tɕi24]であり、多数は声母が破裂音 t である。これは北方方言の破擦音声母とは異なり、他の南方方言でみられる破裂音声母 t との関連が深いと考えるべきである。

第四章　結章

本研究は漢語の指示代名詞の歴史的変遷について、古代文献の考察及び方言の地理的分布によって、解明を試みたものである。本章では、ここまで論じてきた内容を「各章の要約」及び「結論」において総括し、さらに今後の課題を示したい。

1.　各章の要約

本研究は四つの章から構成された。

第一章は研究の動機、目的、アプローチ及び漢語の指示詞について紹介した。

第二章は上古、中古前期、中古後期の三期について、それぞれの文献を考察した。上古については、《尚書》、《論語》、《荘子》の三文献を取り上げた。この三文献で、使用頻度がもっとも高い近称－遠称のペアは「之」－「其」である。上古において、「之」－「其」は遠近関係を表すほか、照応的な機能を持っている。中古の文献としては、《世説新語》及び仏典四種（《六度集経》、《生経》、《百喩経》、《賢愚経》）を考察した。これらの文献では会話を記述する場面が多く、口語用語が多いため、中古時代の口語の特色を反映していると考えられる。

中古になって、「之」は修飾語としての指示的機能がなくなり、照応関係を表す目的語としてのみ使われている。「其」は上古の用法が中古時代でも継承される。中古における「之」「其」は、照応関係を表す時、遠近関係が中立的になる傾向がある。中古で注目されるのは「爾」の変化である。「爾」は上古で指示代名詞（近称代名詞）としても使われたが、頻度は低く（例えば《論語》では 22 例中 2 例）、人称代名詞（二人称代名詞）として使われる頻度の方が高い（《論語》では 22 例中 13 例）。中古になって変化が現れた。それは「爾」が遠称代名詞として頻繁に用いられるようになったこと（四仏

典では 1063 例中 564 例)、それと連動して二人称代名詞として使われる頻度が低くなったことである。

中古から近代の過渡期の資料として中古後期の《敦煌変文》を取り上げた。この時期の最も大きな変化は「這」及び「那」が指示代名詞として現れたことであり、先行研究では唐詩などでも使われていることが指摘されている。《敦煌変文》では、「這」は近称代名詞として用いられているが、「那」の用例は多くが「どれ」または「なんぞ」という意味であり、遠称代名詞として使われる例は少ない。遠称代名詞の「那」は「這」と対比して用いられている。一方、《敦煌変文》では中古期と同様に「爾」が遠称代名詞として使われる頻度が高い。「那」と「爾」はいずれも鼻音声母の N 音類であり、遠称代名詞は、上古の牙喉音類（其、厥など）・唇音類（彼など）から N 音類に変化したことがわかる。この変化の原因は次のように考えられる。まず、牙喉音類の「其」は中古期に遠近関係が中立的になり、唇音類の「彼」は疎外の感情が含んでおり、口語では疎外、軽蔑な感情を表す場合しか使われなかった。故に、遠近関係を表すことができ、また感情表現にも無標的(unmarked)な遠称代名詞を求めざるをえなかったのであろう。その際、もともと二人称代名詞としても用いられる N 音類の「爾」は新たな遠称代名詞に相応しいものであった。こうして、「爾」が中古時代に遠称代名詞としての頻度が高くなった。それに連動して指示代名詞の「爾」に何か特殊な変化が起きたものかと考えられる。例えば、上古で二人称代名詞として常用された「爾」は、中古になって遠称代名詞として使われるようになったために、二つの用法を区別するため、韻母が i から a に変わった。この変化が完了すると、「爾」の語源が忘れ去られて文字の上は「那」で表すようになった。この仮説はそれを証明する証拠が不足しているが、もしこの仮説が正しければ、「這」の語源も推定できるかもしれない。志村良治（1984）は「這」の発音は中古で tɕa と推定している。その韻母の a はおそらく中古で遠称代名詞として使われ、発音が na になった段階の「爾」に類推したと考える。そして、中古声母 tɕ-は上古

の*t-/*ʈ-に由來するのであるから、「這」の語源は上古でʈ-声母を有した「之」である可能性がある。

第三章では方言分布に基づいて、指示代名詞の歴史的変遷を推定し、さらに変化の成因を明らかにした。近称、遠称の地図のほか、両者を組み合わせた類型地図を作製した。各地図は、指示代名詞の第一成分の声母に基づいて作成し、その分布状況によって変化の過程を推定した。

近称の地図によって、全体として、牙喉音類が舌歯音類に取り囲まれるように周圏分布が見られる。この分布状況から、近称としては舌歯音類が古い語形と推定する。遠称の地図には、おおよそ北方の N 音類と南方の牙喉音類との南方対立が見られる。類型地図の〔地図 III〕では、北方の「TS－N」と南方の「T－K」「TS－K」「N－K」「Ø－K」などの類型という南北対立である。この分布状況だけからは、北方の N 音類と南方の牙喉音類のどちらが古いのが判断し難いが、文献によれば遠称の N 音類の出現は中古以降であることから、上古から存在していた牙喉音類の遠称代名詞が古い類型であると考えられる。そこで、最も古い指示代名詞の類型は「近称 : 舌歯音類－遠称 : 牙喉音類」であり、北方では中古に至って遠称が N 音類に変化したものと考えられる。中古以後の文献が反映する遠称代名詞の多数が「爾」「那」などの N 音類であるのは、それらの文献が北方方言を反映し、南方方言を反映することが少ないためであろう。地図が示す状況は、中古以後、北方、南方それぞれで変化が進行してきたことを反映していると考えられる。

このように、北方の「TS－N」は新たな類型である。一方、南方では、「T－K」、「TS－K」、「N－K」、「Ø－K」などの K 類の遠称が複雑な分布をしている。第三章では、これらの類型の変化の原因と過程も明らかにした。

上で、方言分布から推定される最も古い指示代名詞の類型は「近称 : 舌歯音類－遠称 : 牙喉音類」と述べた。この類型を文献と対照すれば、中古以前の T 類声母近称「之」/TS

類声母近称「是」「茲」「此」「斯」－K 類声母遠称「其」「箇（個）」のような類型である。「T－K」類の T は上古の「之」（上古音再構音 ʈɨə，平声）に遡る可能性があるが、南方方言における T 類近称の声調は上声多いことから（第三章　表 8 を参照）、その T は中古文献に現れる「底」（中古音再構音 tiei，上声）に由来する可能性もある。以上のことから、南方方言における「T－K」/「TS－K」類が古いと推定した。他の類型はこの二つの類型から変化したと考えられる。

（1）T－K / TS－K＞K－K＞K－N

（2）T－K / K－K ＞ ∅－K

（3）T－K / K－K / ∅－K ＞ N－K

変化（3）T－K / K－K / ∅－K ＞ N－K は地理的分布状況により、N－K が新しい類型であると推定したが、その変化の原因についてはなお議論の余地がある。他の変化には次の要因が関与していると考えられる。

（1）文法化の発生

（2）同音衝突の影響

（3）方言接触の影響

要因（1）は変化（1）の前半（T－K / TS－K＞K－K）と変化（2）を説明する。T－K/TS－K＞K－K という変化した原因は、K 声母を有する量詞「箇（個）」が文法化して指示代名詞になったことである。変化（2）（T－K / K－K ＞ ∅－K）が発生した原因は、零声母の数詞「一」が文法化して近称代名詞になったためである。数詞、量詞の文法化が南方方言における指示代名詞の変化に大きな影響を与えることが分かった。筆者が収集した方言データでは、このような文法化は北方方言ではまだ発見されていない。

要因（2）は「K－K」類型の成立に伴う変化を説明する。文法化して、近称と遠称が同じく K 類声母なった方言は同音衝突を避けるために声調または韻母を変えたのである。

要因（3）は変化（1）の後半（K－K＞K－N）を説明する。南方地域の西北外縁では「K－N」類が分布している。その地域はおそらく北方方言「TS－N」類と接触し、N類遠称を受け入れたと考えられる。

2. 結論

上古で最も頻度が高い指示代名詞のペア「之」－「其」は、中古になると指示機能が変わるか遠近関係が中立化したために、変化が始まった。中古期の顕著な特徴として、「爾」が遠称代名詞として使われる頻度が飛躍的に高くなり、唐代になると「那」が現れた。このことは「爾」と「那」の同源関係を暗示している。（以上第二章）

現代方言の地理的分布から、南方方言における指示代名詞の類型の変遷を明らかになった。その変化には量詞、数詞の文法化が重要な影響を与えた。また、近称と遠称の相互的類推、同音衝突の回避、方言接触も変化に影響を与えた要因である。これらの要因はいずれも指示代名詞に不規則音韻変化を生起させた。これは従来の文献に頼った分析では解明できない新たな知見である。（以上第三章）

最後に、今後の課題として次のものがある。まず、山西省及び福建省北部に遠隔分布する「兀」系遠称。これをどのように扱うかが指示代名詞の歴史的変遷の推定にも大きな意味をもつ。次に、K 類指示代名詞の広範囲分布状況によって、中古時代における「箇」が量詞から指示代名詞へと文法化したスピードはかなり速かったと推定される。このような文法化が具体的にどのような過程で進行していったか、これも今後の課題である。

参考文献一覧

〈引用文献〉

中国語文献　（拼音順）

曹志耘主編 2008 《漢語方言地圖集》，商務印書館。

陳鴻邁 1991 〈海口方言的指示代詞和疑問代詞〉，《中國語文》Vol.1, pp.34-40。

陳興偉 1992 〈義烏方言量詞前指示詞與數詞的省略〉，《中國語文》Vol.3, p.206。

陳玉潔 2010 《漢語指示詞的類型論研究》，中国社会科学出版社。

_____ 2011 〈中性指示詞与中指指示詞〉，《方言》Vol.2, pp.172-181。

鄧軍 2008 《魏晉南北朝代詞研究》，上海人民出版社。

郭錫良 2010 《漢字古音手冊》，商務印書館。

侯精一 2012 〈山西、陝西沿黃河地區漢語方言第三人稱代詞類型特徵的地理分布與歷史層次〉，《中國語文》Vol.4, pp.309-318 頁。

賈學鴻 2012 〈《莊子》文本楚語考釋舉要〉，《諸子學刊》Vol.6, pp.137-151。

李榮 1965 〈語音演變規律的例外〉，《中國語文》Vol.2, pp.116-126。

李佐丰 2003 《先秦漢語實詞》，北京廣播學院出版社。

練春招、侯小英、劉立恒 2010 《客家古邑方言》，華南理工大學出版社。

柳士鎮 1992 《魏晉南北朝歷史語法》，南京大學出版社。

呂叔湘 1982 《中國文法要略》，商務印書館。

_____ 1990 〈指示代詞的二分法和三分法〉，《方言》Vol.6, pp.401-405。

呂叔湘著、江藍生補 1985 《近代漢語指代詞》，學林出版社。

馬建忠 1898 《馬氏文通》，商務印書館。

潘允中 1982 《漢語語法史概要》，中州書畫社。

裘燮君 2008 《商周虚詞研究》，中華書局。

史存直 1986《漢語語法史綱要》，華東師範大學出版社。

石汝杰、劉丹青 1985 〈蘇州方言量詞的定指用法及其變調〉，《語言研究》Vol. 1,

pp.160-166。

石毓智 2001 《漢語語法化的歷程——形態句法發展的動因和機制》，北京大學出版社。

_____ 2002 〈量詞、指示代詞和結構助詞的關係〉，《方言》Vol.2, pp.117-126。

王燦龍 2006 〈試論“這”“那”指称事件的照応功能〉，《語言研究》Vol.2, pp.59-62

王洪鍾 2011 《海門方言語法專題研究》，安徽師範大學出版社。

汪化云 2008 《漢語方言代詞論略》，巴蜀出版社。

王力 1954 《中國文法理論　下冊》，中華書局。

_____ 1980 《漢語史稿》，中華書局。

伍云姬 2008 〈湖南方言中代詞與代詞之間的音韻關係〉，《湖南方言的代詞》, pp.1-29, 湖南師範大學出版社。

向熹 1993《簡明漢語史》(下篇)，高等教育出版社。

小川環樹 1981 〈蘇州方言的指示代詞〉，《方言》Vol.4, pp.287-288。

岩田礼 2009 《漢語方言解釈地図》，白帝社。

楊樹達 1930《高等国文法》，商務印書館。

詹伯慧主編 2002 《廣東粵方言概要》，暨南大學出版社。

張洪年 2006 〈早期粵語「個」的研究〉，《山高水長：丁邦新先生七秩壽慶論文集》: pp.813-835。

張惠英 1994 〈閩南方言常用指示詞考釋〉，《方言》Vol.3, pp.212-217。

_____ 2000 《漢語方言代詞研究》，語文出版社。

張維佳 2005 〈山西晋語指示代詞三分系統的來源〉，《中国語文》Vol.5, pp459-467。

張玉金 2006 《西周漢語代詞研究》，中華書局。

趙彤 2006 《戦国楚方言音系》，中国戯劇出版社。

趙日新 1999 〈說「个」〉，《語言教學與研究》Vol.2, pp.36-52。

周法高 1972 《中國古代語法：稱代篇-中央研究院歷史語言研究所專刊之三十九》，台聯

國風出版社。

周生亞 1980 〈論上古漢語人稱代詞繁複的原因〉,《中國語文》Vol.2, pp.127-136。

周小兵 1997 〈廣州話量詞的定指功能〉,《方言》Vol.1, pp.45-47。

竹越美奈子 2005 〈廣東話遠指詞“嗰”的歷史演變〉,《中國語文研究》Vol.2, pp.19-24。

日本語文献 （五十音順）

太田辰夫 1958 《中国語歴史文法》, 江南書院。

志村良治 1984 《中国中世語法研究》, 三冬社。

鈴木直治 1994 《中国古代語法の研究》, 汲古書店。

竹越美奈子 2012a 〈十九世紀の広東語（2）“個”〉,《KOTONOHA》第 115 号：pp.4-8。

_____ 2012b 〈十九世紀の広東語（3）続“個”〉,《KOTONOHA》第 116 号：pp.1-2。

〈第二章で使用した文献のテキスト及び注釈書〉

テキスト

《夏僎尚書詳解》（(宋)夏僎撰, 清乾隆敕刻武英殿聚珍本）

《陳經尚書詳解》（(宋)陳經撰, 清乾隆敕刻武英殿聚珍本）

《論語意原》（(宋)鄭汝諧撰珍本, 清乾隆敕刻武英殿聚）

《莊子集釋》（（清）郭慶藩撰；王孝魚點校, 中華書局, 1995）

《世説新語箋疏》（(南朝宋)劉義慶著；(南朝梁)劉孝標注；余嘉錫箋疏；周祖謨等整理, 上海古籍出版社, 1993）

《大正新脩大藏經》—《六度集経》、《生経》、《百喩経》、《賢愚経》（大藏經刊行會編, 新文豐出版, 1983）

《敦煌変文新書》（潘重規編著, 文津出版社, 1994）

和訳、注釈書

《国訳一切経　本縁部七》（大東出版社，1930）

《国訳一切経　本縁部十一》（大東出版社，1930）

《中国古典文学大系》（平凡社，1981）

《荘子　内篇》（福永光司，朝日新聞社，1966）

〈第三章　表 7、表 8 で使用した方言資料〉

梅縣：李如龍、張雙慶主編 1992 《客贛方言調查報告》，廈門大學出版社。

從化縣：詹伯慧、張日昇主編 1988 《珠江三角洲方言詞匯對照》，廣東人民出版社。

河源縣、紫金縣、龍門縣、龍川縣陀城、連平縣忠信、新豐縣大席：劉叔新 2007 《東江中上游土語群研究——粵語惠河系探考》，中國社會出版社。

增城縣：王李英 1998 《增城方言志（第二分冊）》，廣東人民出版社。

廉江縣青平鎮、電白縣沙琅鄉、陽西縣塘口鄉：李如龍等 1999 《粵西客家方言調查報告》，暨南大學出版社。

連縣保安鎮、連縣西岸鎮：張雙慶主編 2004 《連州土話研究》，廈門大學出版社。

〈第三章　表 10 で使用した方言資料〉

江西省地方志編纂委員會編 2005. 《江西省方言志》，方志出版社。

〈主要参考方言資料〉（上記以外）

漢語方言詞彙第 2 版（北京大學,語文出版社,1995）

普通話基礎方言基本詞彙集（陳章太・李行健,語文出版社,1996）

山西方言調査研究報告（山西高校聯合出版社,1993）

陝西關中東府五縣市方言志(李虹著,劉靜主編,陝西師範大學出版社,2006）

安徽省志 65 方言志（方志出版社,1997）

徽州方言(徽州文化全書)（孟慶惠,安徽人民出版社,2005）

黟縣宏村方言（謝留文・沈明,中國社會科學出版社, 2008）

當代吳語研究（錢乃榮,上海教育出版社,1992）

南通地區方言研究（鮑明煒・王均,江蘇教育出版社,2002）

湖北方言調査報告(趙元任等,商務出版社,1948）

安陸方言研究（盛銀花,湖北長江集團・湖北人民出版社,2007）

湖南省志 25　方言志（湖南人民出版社,2001）

湖南方言調査報告(楊時逢,中央研究院史語所,1974）

贛方言概要（陳昌儀,江西教育出版社,1991）

客贛方言調査報告（李如龍・張雙慶,廈門大學出版社,1992）

客贛方言比較研究（劉綸鑫,中國社會科學出版社,1999）

江西省方言志（陳昌儀,方志出版社,2005）

福建省志 方言志（方志出版社,1998）

福建縣志方言志 12 種 建陽市方言志（李如龍,福建教育出版社,2001）

閩東方言詞彙語法研究（林寒生,雲南大學出版社,2002）

閩北區三縣市方言研究（秋谷裕幸,中央研究院語言學研究所,2008）

閩語研究（陳章太・李如龍,語文出版社,1991）

珠江三角洲方言詞彙對照（詹伯慧・張日昇,廣東人民出版社,1988）

新豐方言志（週日健,廣東高等教育出版社,1990）

粵西十縣市粵方言調查報告（詹伯慧・張日昇，暨南大學出版社,1998）

粵北十縣市粵方言調查報告（詹伯惠等,暨南大學出版社,1994）

粵西客家方言調查報告（李如龍等,暨南大學出版社,1999）

樂昌土話研究（張雙慶等,廈門大學出版社,2000）

連州土話研究（萬波等,廈門大學出版社,2004）

東江中上游土語群研究-粵語惠河系探考（劉叔新,中國社會出版社,2007）

廣西通志 漢語方言志（廣西人民出版社,1998）

廣西玉林市客家方言調查研究(陳曉錦,中國社會科學出版社,2004）

廣西北海市粵方言調查研究（陳曉錦・陳滔,中國社會科學出版社・線裝書局,2005）

廣西漢語方言研究(謝建猷,廣西人民出版社,2007）

雲南省志 58 漢語方言志（吳積才,雲南人民出版社,1989）

貴州省志 漢語方言志（方志出版社,1998）

語形一覧

地図 I、II、III に現われた語形をすべて列挙する。
漢字表記の□は語源が特定できず、また用字法も定まっていない形態素を示す。
音声表記 - （ハイフン）は、原資料に音声表記を欠くことを示す。

［地図 I］

A.N 音類

A-1：n/ɲ-

喏 [no]。

□个 [ne ko][ni kɔ][ni ko][nɔŋ ke][nɛi ka][nie -][nʔ ko][nɔN ka][ne -][nie -][nɔN ka][ni ke][niɔŋ kei]

□只 [nau ʧie][no ʧo]

这个 [nɛ ko][ne ko][ɲiɛ kə][ne -]

乜个 [niɛ ko]

尔个 [n ka][ni ke]

呢个 [nɐi kɔ][ni kɔ][nei kai][nei kɔ][nei kɔ][ni kɔ][ni kɔ][ni ko]

呢只 [ɲi tsiak][ɲi tsak][ɲi tsiak][ni tsak]

泥个 [nɛi ka]

嗫个 [niɛ kɤ]

咧个 [nie kuo]

能只 [ɲiaŋ tsiak][ɲiaŋ tsiak]

嗯者 [n tsɔ]

啮格 [nie ge]

呢一个 [nɛ A kɔ][ni jiɐt kɔ]

A-2：l-

这 [li][lia]。

□个 [le ke][lei kɤ][li kai][li ko][li ko][li kai]

□只 [li tʂak][li tʂak]

□介 [liaʔ kai]

这个 [lɛ kɛ][le ko][lia kai]

这条 [liɛ laɔ][lɛ lao]

里个 [li ko]

里只 [li tʂak][li tʂak]

里様 [li ʒioŋ]

呢个 [lei kɔ][lei kɔi][li kɔ][li kɔ][li kɔ][li kuɔ]

呢□ [lɐi na]

犁个 [lɛ ki]

离个 [lɐ kɔ]

利拉 [lɐi la]

俚葛 [li kEʔ]

B. 唇音類

p：

□□ [pie ta]

□个 [pie ta]

彼个 [pie ta]

C. 牙喉音類

C-1：k-

□ [kə][kɪʔ][ko]

个 [kai][kɤ][ko][kuo]

其 [ki]

居 [ki]

格 [kə]

该 [kæ][kiIʔ]

箇 [kei][ko]

□□ [ko ta][kɔ kɐu][kɔ naŋ][kɔ nɔ][kə kə][kə na][kɤə kɤə][kɤə na][kɯ kəi][ko ni][ku kuo][kɔ kɔ][ket nam][ko ko][kut na][kut tin][ka ka][kə ku][ke to][kei kɯ][kɤ səŋ][kɤ ta][kɪʔ kɪʔ][ko diau][ko tɕia][ku ku]

□介 [kæ kæ][kai kai][kai kei]

□区 [kiɛ k^{h}ɛu]

□件 [kɛ kaNi]

□那 [kɔ na]

□葛 [kɪʔ goʔ][ki kəʔ]

□岳 [kɪʔ ŋɔʔ]

□或 [kɪʔ ɦɔʔ]

□篮 [kai lɔN]

□呢 [kə ne]

口只 [ka tsik][kɔ tsɛk][kæ tsaʔ][kai tsak][kai tsaʔ][kɐk tsɐk][kɔ ʧak][kɔ ʧiɛk][kɔ ʧik][ki ʧik][ki tsak][ki tsɐk][ke ˗][kɔ taʔ][kɔ tsak][kɔ tsak][ki tsak][ki tsak][ko ta][ko tsak][ku ʨia][kut tsak]

口个 [kɐi ko][kɔ kɔ][kɔ kɔ][kɔ kɔ][kə kɔ][kə ki][kei ko][kəʔ kɤ][kɛʔ kʊ][kʰɤə kɔ][ki kai][ko kɔ][ko ko][koi ko][ku kœ][ku ku][kuə kuə][kɐt kai][kʰuɔ kɔ][kei ˗][ko ˗][ku koə][ka ˗][ke ˗][ko ˗][kou ˗][ku ˗][ka kiæ][kæ kæ][kai ko][kɔ kai][kɔ kɔ][kɔ kɔ][kɔi kɔ][ke kɤ][ki ˗][ku la][kʰua ka][kʰui kɔ]

这只 [kei tso]

这个 [kɔi ko][ke ke][ke ko][ke ko][kə na][kei kəʔ][kei ko][kəʔ kə][kəʔ kɤɯ][kɛʔ ko][kʰə ko][ki kə][ki kəʔ]

咯只 [ko ʨy][ko tsa][ko tsa][ko tsa][ko ʧia]

箇只 [kɤ tsa][ko taʔ][ko taʔ][ko taʔ][ko ʨia][ko tsa]

箇个 [kɔ kɔ][ko kɔ][ko ko][kø kuø][kot ko][ku ko]

箇(口旧) [kø kɔ]

箇粒 [kø naN]

个只 [kə ʧɐt][ko la][ko ʨak][ko ʈia][kou ʧiɛ][kɔ tsek]

个个 [kai kai][kəʔ kəʔ][ko kɔ][ko ko][ko koʔ][kuku][kuo kuo]

个介 [kɔ kai][kɔ kai]

该只 [kɔi tsak][kœ tʂa][koi ta]

该个 [kæ kæ][kæ ke][kæ kuo][kai kai][kai kei][kai ki][kɔi kɔ][kɔi ko][kɛi kɔ][kɛi kɔ][kɛi ko][kei kɐ][ki kai][kø ko][kœ kɔ][kœ kɔ][kœ ko][koi kɔ][koi ko][koi kuai][kʰuɔi kuɔi]

该葛 [kE kəʔ]

该掰 [kɛ gəʔ]

该股 [kœø ku]

葛个 [kɛʔ kɑ][kəʔ kaʔ][kəʔ kəʔ][kəʔ kɤɯ][kʊʔ kʊ]

葛件 [kɐʔ ɖʑiɪ]

葛葛 [kɐʔ kɐʔ][kəʔ goʔ][kəʔ kəʔ][kəʔ ȵiAŋ kəʔ][kɪ kɛʔ]

葛谷 [kɐʔ kɔʔ]

介只 [kiai tsa]

介个 [ka ka]

介呵 [kɑ hɤ]

改只 [kɛi tsa][koi ta]

固只 [ku ʧa]

固个 [ku ko]

国个 [ke kæi]

盖只 [koi ta]

乞个 [kəʔ kəʔ]
启個 [k^{h}ai kɔ]
居个 [kei kai]
姑個 [ku kɔ]
估拉 [ku la]
咯个 [kai ko][kə kə][kei kei][kɛi kɛi][ko kɔ][ko ko][ko kɤ]
咯(里ß) [ko na]
咯甲 [ko ʈa]
咯则 [ke tɕie]
格个 [kə kə][kə kə][kəʔ kɤ][kəʔ ko][kɛʔ kʊ][kɛʔ kv][kiəʔ kɤ]
格则 [ke tɕie]
哩個 [ki kɔi]
基个 [ki goʔ][ki ˍ]
解个 [kæ kæ]
隔个 [kæʔ kæʔ]
讲葛 [kAŋ kɛʔ]
鉴葛 [kæ kəʔ]
果条 [kʊ diɑʌ]
界股 [kai ku]
箇一个 [ko it ko]

C-2：g-
𢇁[gəʔ]
□□ [geʔ ke][giʔ gə][gia k^{h}ɛn]
□个 [gi kaʔ]
这个 [giʔ go]
𢇁□ [gəʔ kɪʔ]
𢇁个 [gəʔ ˍ][geʔ kəʔ][gəʔ kɯ]
𢇁𢇁 [gɐʔ gɐʔ][gəʔ gəʔ]
惹只 [gia tsak]
哀葛 [gəʔ kəʔ]

C-3：h-
□ [hia]
□只 [hia tɕia]
□个 [hi kie]

这粒 [ha lai]
许个 [hi kai]
迄好个 [hit tsit ke]

D. 零声母類

D-1：i-

意 [i]
这 [ia]
□□ [i tsia][ia tsia]
□粒 [i nɐp]
□事 [i hai]
□其 [ia k^hai]
□只 [i tsia][i hai][i tsia][ia tsia][ie tsia][ie tsia][iei tsia]
□个 [i ko][i ku][i ˍ][i ka][i ˍ] [i ke][i ki][iau kɛ]
这个 [ia ke]
伊只 [i tsak][i tsou]
伊个 [i kɐ][i ko][i ko][i ko][i ko][ieʔ kɐi]
底只 [i tsaʔ]
底个 [i ke]
样只 [iaŋ tsaʔ][iɔŋ tsia]
样个 [iaŋ ke]
(口样)只 [iɔŋ tsia]
一只 [it tsa][it tsak]
乙个 [iEʔ kæ][ieʔ kɤʔ][iʔ kɑ]
乙号 [ieʔ xɑɔ]
乙事 [i xai]
已(里阝) [i na]
已介 [i kai]
约只 [iɔ tsia]
尔只 [i tso]
以个 [i kɤ][i ko][i kɤ]
依个 [i ko]
焉个 [ie kəɯ]
噎葛 [iəʔ kəʔ]
□蜀隻 [i tsi tsia]

乙个□ [iEʔ kəʔ lE][ieʔ kɤʔ lɐi]
伊个来 [iʔ kɤ lɐi]
约蜀只 [iɔ tsi tsia]

D-2：a-
□□ [a lai][a lie]
□个 [a kɔ][ai ko][ai kə]
这个 [ai kəɯ]
伊个 [a ta]

D-3: ɛ-
□只 [ɛi tsak]
□个 [ɛ kɔ]
该个 [ɛi ko]

D-4：u-
□□ [uai tso]
□家 [u ˍ]

E. 舌齒音類

E-1：t-
□ [tiɔ][tiɛ][tit]
底 [ti]
这 [tei][ti][ti]
宰 [tsai]

□□ [tei ts^{h}a][ta la][tit kɛ][to tia]
□只 [tɛ ta][ti tsək][tei ʧie][ti ʧak] [ti tsak]
□个 [te ko][tiɛ kuəʔ][ti kɔi] [ti kə][ti kæ][ti kai][ti kei][tei ˍ] [ta ˍ][te ˍ][tɤ ˍ][ti ˍ][tie ˍ] [te ˍ]
□静 [ti ts^{h}A]
当个 [tɔŋ kɛi]
底个 [te kuəʔ][ti kai]
底介 [ti kei]
底只 [ti ʧa][ti tsak][ti tsaʔ]

抵只 [ti ʧak]
这个 [ta ko][tæ ˍ][tɛ ko][te ko][te ko][teiʔ keiʔ][ti kei][ti ko][tieʔ kɤ][tθɤ kɤ][tɛ ˍ]
这介 [ti kæ]
这古 [tai ku]
帝个 [ti ˍ]
谛个 [ti kai][ti kai]
谛介 [ti kai]
得个 [tɛ ko]
嗒个 [ta ˍ]
点具 [təi k^hoi]
这一个 [tiɔo]
这□ 个 [tɛ laŋ ko]

E-2：d-
迭 [dieʔ]
荡 [dɔN]
迪个 [dɪʔ kɤ]
迪掰 [dɪʔ gɐʔ]
迭掰 [dɪʔ gəʔ]
迭葛 [dɪʔ kəʔ]
哩只 [di tsak]
特个 [dəʔ kɤ]
特掰 [dɐʔ gɐʔ]

E-3：tʂ-
□ [tʂɛ] [tʂuo]
者 [tʂə]
这 [tʂæ][tʂæ][tʂə][tʂE][tʂei][tʂɛʔ][tʂɤ][tʂi][tʂr] [tʂɿ][tʂɿʔ]
着 [tʂuɤ]
□ □ [tʂɿ iɛ]
□ 个 [tʂəu əʔ][tʂei kɤ]
这□ [tʂei iɛ][tʂɤ iɛ][tʂɿ ɛ]
这一 [tʂɿ iɛ]
这个 [tʂæ][tʂæ][tʂai kə][tʂɔ][tʂə kɔo][tʂɛ kə][tʂə kə][tʂɛ kəʔ][tʂɛ kɤ][tʂe ko][tʂɛ ko][tʂe ko][tʂɛ ko][tʂə kuə][tʂe kuəʔ][tʂə kuo][tʂɛ][tʂə][tʂei ɤ][tʂei kəʔ][tʂei kɤ][tʂei ko][tʂei kuæ][tʂei kuai][tʂei kuəʔ][tʂəu kəʔ][tʂɛʔ kɛ][tʂəʔ kə][tʂəʔ kəʔ][tʂəʔ kɤ][tʂəʔ kuəʔ][tʂəʔ

kʌ][tʂəʔ tʂɛe][tʂəʔ ʌ][tʂəʔ][tʂɤ kɔ][tʂɤ kə][tʂɤ kɤ][tʂɤ kuo][tʂɤ tʂao][tʂi kə][tʂL kə][tʂɯʔ ko][tʂo][tʂɿ kə][tʂɿ kəʔ][tʂɿ kɤ][tʂɿ kɤ][tʂɿ iɛ][tʂɿ kai][tʂɿ kə][tʂɿ kəʔ][tʂɿ kəʔ][tʂɿ kəʔ][tʂɿ kɤ][tʂɿ kɯ][tʂɿ ko][tʂɿ kuæ][tʂɿ kuæ][tʂɿ kuæ][tʂɿ kuɛ][tʂɿ:ɤu][tʂɿə k][tʂɿə kɤ][tʂuo][tʂʌ][tʂə kə][tʂei kə]

这也 [tʂei iɛ]

这呀 [tʂɛ ia]

这块 [tʂai uai][tʂəʔ xuai]

这悔 [tʂei xue]

致个 [tʂɿ kɔ][tʂɿ kɤ]

寨块 [tʂai uai]

之介 [tʂɿ kei]

这一个 [tʂei ie][tʂəʔ iɤ][tʂɿ i kai]

这一外 [tʂɿ iE]

这一块 [tʂə iəə][tʂei iɛ][tʂei iəə][tʂɿ iE]

这半拉 [tʂei pan la]

E-4：ts/tʃ/tɕ/z/dʑ

□ [tɕie][tsuə][tɕia][tsi][tsuo]

只 [tsi]

(口宰) [tsai][tsæi][tsai]

这 [jie][tɕiə][tɕiei][tsa][tsai][tsɔ][tsə][tsəʔ][tsɿ][zao][zuo]

即 [tsit]

呰 [tsɿ]

宰 [tsɛ]

记 [tɕi]

载 [tsai]

□ □ [tsi tsia][tʃi kəi][tso ta][tsɿ ko][tɕie ke][tsa tse][tsən]

(口宰)一块 [tsɛ iɛ]

□ 个 [ja kai][tsie kuo][tɕie ˍ][tɕie ˍ][tsɿ kɑ]

□ 只 [tsia ʒiaʔ]

己葛 [tɕij kɛʔ]

之个 [tsi kuo]

介个 [tɕie kə]

只个 [tsi ˍ][tsi kai][tsɿ ka]

只介 [tsɿ ka]

只只 [tsi ʒieʔ][tʃɿ tʃa][tsi ieʔ][tsi tse]

只其 [tsi ki][tsi ki]

吉个 [tɕiəʔ go]

吉口 [tɕiəʔ ki]

在也 [tsɛ iɛ]

此个 [tsi koi]

此只 [tsi ʒiɛʔ][tsie lieʔ]

自个 [tsɿ kɔo]

即个 [tɕie ke][tsi kai][tsi ke][tsit e][tsit ge][tsit ge][tsit ke][tsit le][tsit][tsiʔ e][tsiak ge]

即牙 [tsʰit ge]

即只 [tsia tsia][tsi tsia][tsia tsia]

即其 [tsi kai]

志个 [tsɿ kʌɤ]

咋个 [tsa kʊ][tsa kv][tsaʔ kʊ]

者个 [tse kai][tse ke][tsia kɔi]

者只 [ʧa ʧa][ʧiɑ ʧiɑ][tsia tsia][tsia ʒiɛk][ʧa ʧia][ʧia ʧia][ʧiɒ ʧiɒ]

这口 [tɕiɐ liɐʔ]

这一 [tsai it]

这个 [ʥiəʔ kə][jie go][ʧə kə][ʧə kə][ʧə kə][ʧɛ kə][ʧə kə][ʧə kuə][tɕə ˗][ʧə][ʧəŋ kɔ][tɕi kɔi][tɕi kəʔ][tɕi kəʔ][tɕi ko][tɕiə kə][ʧiE kə][tɕie ke][tɕie kə][tɕiɛ kə][tɕiɛ kəʔ][tɕiɛ kəʔ][tɕie kɤ][tɕie kɤ][tɕie kʌʔ][tɕiɛ][tɕie][tɕieʔ kəʔ][tɕiəʔ kø][tɕiɪ kə][tɕiɪ ko][tɕiʔ ko][ʧɾ ko][tsæ][tsai ko][tsɛ kɔ][tsɛ kə][tsə kə][tsɛ kɛ][tsə kə][tsə kə][tsɛ kɤ][tsɛ ko][tse ko][tse ko][tse ko][tsə ko][tse ko][tse ko][tsɛ ko][tsə ko][tse ko][tsə ko][tse kuæ][tsə kuə][tsə kuə][tsɛ ˗][tse][tsei kə][tsei kɤ][tsei ko][tsei ko][tsei kuei][tsɛi kuəʔ][tsei kuəʔ][tsei][tsəʔ ɣɤ][tsəʔ kə][tsəʔ kə][tsəʔ kə][tsəʔ kəɯ][tsəʔ kəʔ][tsəʔ kəʔ][tsəʔ kəʔ][tsəʔ kəʔ][tsəʔ kɤ][tsəʔ ko][tsəʔ kø][tsəʔ ko][tsəʔ kɵ][tsəʔ kʊ][tsəʔ kuəʔ][tsəʔ kuəʔ][tsɤ kə][tsɤ kə][tsɤ kəʔ][tsɤ kɤ][tsɤ kɤ][tsɤ ko][tsɤ ko][tsɤ kuo][tsɤ kuo][tsɤ kuo][tsi kai][tsi ko][tsi koi][tsia e][tsia koi][tsie ka][tsie kɤ][tsiɛ ko][tsik ge][tsik ke][tsit le][tsit le][tsitsa kɔi][tsɿ ˗][tsɿ jA][tsɿ kɔ][tsɿ kɔ][tsɿ kɔo][tsɿ kə][tsɿ kə][tsɿ kə][tsɿ kə][tsɿ kɤ][tsɿ ko][tsɿ ko][tsɿ ko][tsɿ ko][tsɿ kuo][tsɿ mə][zə kə][zə kuə][zeʔ go][tsa ˗]

这乇 [tɕiɐ nɔʔ][tsɛ nɔ]

这只 [ʧiɔ ʧiɔ][ʧɾ tsa][tsa ʑiɐʔ][tsa ʒieʔ][tsa ʒieʔ][tsai tsiɛʔ][tsai ʒiɛk][tseik][tsi tsieʔ][tsi ʒiaʔ][tsi ʒiek][tsi ʒieʔ][tsia tsia][tsiɔ tsiɔ][tsie tsia][tsie tsiek][tsie tsieʔ][ʧa ʧa][tseik][tsia ieʔ]

这号 [tsei]

这件 [tsie yoŋ]

这回 [tsi uoi][tsui]

这块 [tsai k^{h}uai][tse k^{h}uai][tsəʔ k^{h}uai][tsəʔ xuai][tsɿ kuai][tsɿ uai][tsʌʔ xuæ]
这条 [tsɿ diau]
这里 [tsi lie]
这其 [tsi ki]
这槐 [tsəʔ xuai]
指个 [tsi kɛ]
接个 [tɕiəʔ koʔ]
藉个 [tɕiɛ ko]
结谷 [tɕiɪʔ kɔʔ]
载个 [tseɿ kəu]
这蜀只 [tsie lyo tsia][tsie syo tsia][tsaʔ søk ieʔ]
这只个 [tsi tsieʔ]
□蜀个 [tɕioŋ ɕi kəi][tɕioŋ ɕi kɛi][tɕioŋ ɕi kəi][tɕioŋ ɕi kɛi]
讲基个 [tɕiɑŋ ki goʔ]
这儿个 [tsɛ kə]
只蜀个 [tsit ɬok ke][tsit ɬoʔ ke]
者蜀只 [tsie lyo ʒiɑ]

［地図 II］

A.N 音類

A-1：n/ȵ-

□ [nuə][niɛ][nuo][ȵiɒN][na] [nen]

乃 [næe]

乜 [ȵiə]

那 [na][nɑŋ][nao][ne][nə][nɛi][nɛʔ][nie][no][nuo]

奈 [næ][nai]

挪 [nuɤ]

喏 [no]

诺 [nuo]

□□ [na kai][na kəi][na kœ][na na][nɔ tɔ][nu na][nu tin][ȵi kə][ȵi kəi][na la][na tɕia][nə kə][ne ku][ni ku][no tia][no tse]

□只 [n tsak][nɐt ʧɐt][nɔ tsɛk] [ȵiŋ ‐][n tʂak][n tʂak][n tʂak] [nɐk tsɐk][nau ʧie][nɔ ʧiɛk][no ʧo][nu tsɛk]

□个 [n ko][na ku][nɐt kɔ][nɔ kɔ][ndeŋ ka][ndeŋ kɔ][ndeŋ kuɔi][nəu əʔ][ni kɔ][niɛ kuo][nu kɔ][ȵi kə][ȵi ko] [na ‐][nai ‐][naŋ ‐][ne ‐][nə ‐][nei ‐][nei kɤ][nən ‐][nɤ ‐][nia ‐][nie ‐][no ‐] [ȵ ‐][n kai][n kɔ][n ko][ndeŋ kɔ][ni kiæ][noi ki][nu kɔ][nui ki][naŋ kɛi] [ȵiə kə]

□介 [niɪN kæ]

□様 [ne ‐]

□项 [ȵi haŋ]

(口奴)个 [nɔ kɤ]

乃个 [nɑi ge]

乜个 [niə kə][nie kɤ][niɛ ko][niə kuə][niŋ kɔ][ȵiə kə][ȵie lɑ]

尔个 [n ko][n li][ȵi kɤ][ȵi ko]

尔只 [n tʂak]

尼个 [ni ‐]

倪个 [ȵi ko]

你個 [n kɤ]

那□ [na kɤə][na kɐu][næ iɛ][næ kuæ]

那个 [n ‐][n kɤ][n ko][na k][na kɔ][nɑ kɔo][nɑ kə][nA kə][nɑ kə][na kə][nɑ kəʔ][na kɤ][na k^huai][na ko][na kœ][na koi][nɑ koʔ][nA kuə][nɑ kue][nɑ kuə][na kuo][na kʌʔ][na ta][na][nɑ][nɒ][næ kuæ][næN kɤ][nai ɤ][nai kə][nai kɛ][nai kə][nai kɤ][nai ko][nai ko][nai kuai][naŋ kei][naɔ][nɔ ka][nɔ kɔ][nɔ kə][nɔ kə][nɔ][nɔN kɐ][nɛ kai][nɛ kɔ][nɛ kɔo][nɛ kə][nɛ kə][nɛ kə][nə kə][nɛ kɤ][nə kɯ][nə ko][ne ko][nɛ

kuɛ][ne kuəʔ][nɛ][nə][nɛe kəʔ][nɛe kuəʔ][nɛe kʌ][nɛe ʌ][nei kə][nɛi kə][nei kəʔ][nei kɤ][nɛi ki][nɛi kuəʔ][nəi kuɛʔ][nei kuəʔ][nəu kəʔ][nəʔ ɣɤ][nəʔ kə][nəʔ kəʔ][nəʔ kəʔ][nəʔ kəʔ][nəʔ kɤ][nəʔ kuəʔ][nəʔ kuəʔ][nəʔ kʌ][nəʔ kʌ][nəʔ ʌ][nɤ kə][nɤ kə][nɤ kɤ][nɤ kɯ][ni kəʔ][ni kəʔ][ni ko][nie ge][niɛ kə][niə kə][niE kəʔ][niɛ kəʔ][nie kəʔ][nie kʌʔ][niɛ][nieʔ kɤ][no ko][no][noɐ ka][nuo kuei][nuo kuo][nuo][ɲi kɔ][ɲiɛ kəʔ][ɲie kɤ]

那只 [na tsa][na tsa][na tsak][na tsik][no tso][na ʧia]

那号 [na hau][nai]

那粒 [na lai]

那葛 [nɑ kəʔ]

呢个 [ni kə]

呶个 [nɔ kɯ]

奈一 [næ iɛ]

奈个 [nai ge][nai kɤ][nɛ kɔ][nɛ kɤ]

恁个 [ne ko][nəŋ kuəʔ]

恁介 [nei kei][nən kai]

恁只 [nei tsak]

捏个 [niə kə]

哝个 [nom kɑ]

嗫个 [niɛ kə][niɛ kɤ]

爱个 [nɛ kɔo]

讷个 [na ko]

那□个 [nuo luɔ kuo]

那一个 [na i kɤ][nai i kai][niɔo]

那儿个 [nɛ kə]

那半拉 [nei pan la]

A-2：l-

那 [lɑ][lE][lɯ]

□则 [lou ʨie]

□个 [lɛN kɔ][len ko][lu kɔ][luə kuə][lɛ ko][lɛN kɔ][lɛN ko][leŋ kai][ləŋ ko][lou ki][lʊ kʊ]

□只 [lu ʧik][lo ˍ][lai ˍ][lai tsak][ləŋ ta]

那个 [la go][la kɔ][lɑ kə][la ke][la kɛ][la kə][la kɤ][la ko][la ko][la ko][la kɵ][la ko][la ko][la ko][la kuo][la kuo][lɑ lə][la ʈa][la ta][læ kæ][lai kɤ][lai ko][lai ko][laʔ ko][le ˍ][lɛ ko][leN kɔ][ləʔ kɤɯ][lɤɯ kɤɯ][li ?][lia na]

那只 [la ʈia][la ʨya][la tsɿ][le ʧa]

那块 [læ k^huai][ləʔ k^huɛ]

那条 [la diau][lɒ diɑʌ][loŋ laɔ][loŋ laɔ]

那滩 [ləʔ tæN]
那则 [lou tɕie]
奈个 [lɛ kɤ]
拎个 [len kɑ]
咧个 [liɛ ko]
恁个 [lɛ kɔ][lei ko][lɛn kɔ]
恁股 [lɛNŋ ku]
勒个 [lɛ ko][ləʔ kəʔ]
嘞个 [le ˍ]
糯个 [lə kə]
噜个 [lou kɔ]
恁一个 [lɛ it ko]

B.唇音類

B-1：p-

□ □ [pə kə][pu nam][pi ta][pi tso]
□ 个 [pei ku][pi]
□ 那 [pɐi na]
□ 篮 [pui lɔN]
边个 [piN ko]
遐粒 [pʰa lai]
闭个 [pi kɤɯ]

B-2：m-

□ [mai]
妹 [mə]
模 [mə]
□ □ [mə səŋ][mei diau] [mə lie]
□ 个 [məi ˍ][me][m kiæ][mai ku][mieN kæ]
□ 家 [meN ˍ]
么个 [mei kəɯ][məʔ kə][mo ka]
门只 [meN tɕia]
末个 [mə gə][məʔ kəʔ]
每个 [mai kai]
没葛 [məʔ kəʔ]
妹条 [mei diɑʌ]
姆只 [m tɕya]

面个 [mei ka]
面者 [mɪN tsɔ]
密介 [mi kæ]
梅件 [me ʤiɪ]
梅葛 [me kɐʔ]
莫个 [mo kə]
模个 [mu kə]

C.牙喉音類

C-1：k-

□ [ku][kua][kun]
其 [ki]
个 [kəʔ]
介 [kai][ke]
郭 [koʔ]
给 [kI]
许 [kɛ]
该 [kiIʔ]
拐 [kuæ]
过 [kə][kəɯ][ko]
□□ [ka ʧei][kɔ kɔ][kɔ na][kɔ ne][ko ko][ko ni][kuɔ kuɔ][ka kai][kai kai][kai ko][kɔ kɔ][kɔ kɔi][koN ko] [ko na][ko to][ki ts^{h}a][ko lo]
□只 [ku ʧie][ka ʧak][ka tsak][ka tsɐk][kuɔi tsak][ka tsak][kæʔ tsaʔ][kai ʧak][kai tsak][kai tsaʔ][kɔi tsɛk][kɛ ʧak][ke tsak][kɛ tsak][ke tsak][kɤ tsa][ko la][kuai tsak]
□呢 [kə ne]
□拉 [kɔ la][kɔN la]
□粒 [k^{h}y nɐp]
□介 [kɛ kei]
□个 [kə ˗][ke ˗][ke ke][kei ke][kɤ ka][kə koə][ka ka][ka kei][kai kai][kai kɔ][kai ke][kan kɔ][kau kɛ][kɔ kɔ][kɔi kɔ][ke ko][ken ku][kɤ kɑ][kɤ kɤ][k^{h}oŋ kuɔi][kɯəʔ kɤ][kua ko]
□区 [k^{h}ai k^{h}ɛu]
□件 [kɑNi kaNi]
个□ [kəʔ ki]
个个 [kɔ kɔ][kɔ kɔ][kəʔ go]
个么 [ko mo]
个只 [kai tsɐk][kai tsak][kɛi tsak][kou ʧiɛ]

个者 [kɤ tsɔ]
个着 [kɤ tso]
个葛 [kʌɤ kɛʔ]
个様 [kai ʒioŋ]
兀个 [kɛn mɛi]
介个 [kai kai][kiai kə]
介只 [kai tʃak][kai tsak][kai tsək]
归个 [kuE kəʔ]
关葛 [kuE kəʔ]
各个 [ko kai]
吉静 [kAt tsʰA]
改个 [kei ko][koi ko]
改只 [koi ta]
过个 [kə kæʔ][kə kæʔ][kəu kə][kəu kəʔ][kʌɤ kʌɤ]
过葛 [kʌɤ kəʔ][kʌɯ kəʔ]
那个 [kai kai][ke e][ke ke][ke kei][kɤɯ kɤɯ]
那介 [kæ kæ]
姑古 [ku ku]
果葛 [kɛɤ kɛʔ]
咯个 [kei kəɯ][ko ko]
界只 [kæ tʃa][kai tsaʔ]
格个 [kɛʔ kʊ]
骨个 [kuə kɤ]
盖介 [kɔi kai][kuɔi kai]
盖只 [kai tsak][kɔi tsak][kɔi tsiak][kuæ ta][kuɔi tsa][kuɔi tsak][kuɔi tsiak]
渠具 [ke kʰoi]
葛个 [kʊʔ kʊ][kvʔ kv]
葛葛 [kEʔ kEʔ][kəʔ kəʔ]
解个 [ka ka][kai ke]
解介 [kai kai]
箇个 [ko ko]
箇只 [ku tsou]
乌介 [kuɔi kai]
该个 [kæ kæ][kæ kæ][kai ki][kai tʂak]
该只 [kai tsak][kɛi tsa]
该掰 [kɛ gəʔ]
锯介 [kɤ ka]
阶个 [kai kɔ]

顾个 [ku kə]

□ □ □ [kɔN ku la]

咯个□ [ko ko mi]

葛头□ [kəʔ dø̞ʏ kɪʔ]

葛边葛 [kəʔ pi kəʔ]

个加个 [kai ko kai]

个头个 [kəʔ dʏ kəʔ]

过头葛 [ku dɤɯ kə]

杠基个 [kaŋ ki goʔ]

□ 面一岳[kɪʔ mi iɪʔ ŋɔʔ]

□ 面一或[kɪʔ mi iɪʔ ɦɔʔ]

C-2：g-

□ 隻 [guɐ ʧia]

□ □ [gA ke]

𢇁𢇁 [gəʔ gəʔ]

□ 头个 [gɛN dɤ kəʔ][gɛN dɤ kou]

□ 头葛 [geN dø kəʔ]

C-3：ŋ-

□ □ [ŋi ta]

□ 个 [ŋ ˍ][ŋ kɔ][ŋ ko]

兀只 [ŋ tsa]

尔个 [ŋ ko]

那个 [ŋ ko][ŋai kei]

唔个 [ŋ ˍ]

C-4：h/x-

迄 [hit]

海 [hua]

遐 [he]

许 [he][hi][hɯ][hy]

□ □ [xuo ke]

□ 个 [h ˍ][ha ko][hai ko][hm kai][hoi ko][xo xe][hai ˍ][hm kai][xa kə][xai kə][hi ki][hik ge][hik ke][hit le][hm kie][xi koi][ha kai][ha ko][hai ko][hɛ ko][hɛn kɔ][hen ko][xe kæi][xɛ ko][xɛ ko][xɤʔ kɤʔ]

□ 只 [ha taʔ][ha ʒieʔ][xia ʒiaʔ][xai it]xi ieʔ][xia ieʔ][hi ʒieʔ][hie ʒieʔ]

□ 乇 [ha nɔ]

□ 号 [xɤʔ xɑɔ]
□ 股 [hoŋ ku]
亨个 [haN kəʔ][haN koʔ][haŋ goʔ]
迄个 [hit e][hit e][hit ɡe][hit ke][hit le][hiʔ e]
迄牙 [hit ɡe]
那个 [hi kai][ho kai][ho ke][xa kə][xai kɤ]
忽个 [xoʔ kɐi]
或个 [xuo ke]
哈个 [xa kɤ]
海只 [hua tɕia]
喝个 [xaʔ kæ]
遐个 [hia e]
浒个 [xu ki]
许□ [hiɐ liɐʔ]
许个 [hə kai][he kai][hɛ kɔ][hɛ kɔ][hɛ kɔ][hɛ ko][hɛ ko][he ko][hei kai][hɛn kɔ][hi ˍ][hi kɛ][hi koi][hia kɔi][hiak ge][hiɛt ko][hit ge][hu e][hu kai][xi ki][xi koi][xia kɔi]
许乇 [hiɐ nɔʔ]
许只 [hæ taʔ][hai tsiɛʔ][hɛ ta][hɛ ta][hɛ taʔ][hei tsiaʔ][heik][hi tsiɛʔ][hi ʒiak][hi ʒiɛʔ][hi ʒieʔ][hi ʒieʔ][hia tsiek][hy tsieʔ][xa ʑiɐʔ][xa ʒieʔ][xai ʒiɛk][xai ʒiɛʔ][xi ʒiɛʔ][xia lieʔ][heik][xu tsia]
许件 [hi yoŋ]
许回 [hy uoi]
许里 [hi lie]
许其 [hi ki][ho kai][hy ki]
许基 [hy ki]
许蜀只 [hy lyo tsia][hy lyo ʒiɑ][hy syo tsia]
□ 个来 [xɤʔ kɤ lɐi]
□ 即个 [hm tsit ke]
□ 蜀个 [hø ɬoʔ ke][hy ɬoʔ ke][hi tse][hœ ɬo ke]
□ 蜀隻 [xaʔ søk ie]
□ 个□ [xɤʔ kɤʔ lɐi]
喝个□ [xaʔ kə lE]

D.零声母類

D-1：i-

□ [i tsia]
衣 [i]

□个 [i ˍ][i ko][i ke][i ko]
□其 [ia k^hai]
□只 [ieN tɕia]
伊个 [i kɔ][i kɛ][i ko][ʔi kɤ][ʔi kɯ]
伊只 [i tsak]
伊𤆬 [ʔi gɐʔ]
依个 [ʔij keʔ]
耶个 [iɛ kɛ]

D-2：a-
□□ [a naŋ]
□个 [a kɔ][a ko][a ˍ][ai ˍ]
□只 [a ʧik][a ʧik][a tsek][ai ʧak][a tsak][ai tsaʔ]
亚(口旧) [a kɔ]
亚个 [a kuø]
亚头 [a tɔ]
亚粒 [a naN]
那个 [a kɔ][a kɛ][a ko][a tian][a ˍ]
那只 [a tɕia]
阿个 [a kɔ][a ko]
哎只 [ai ʧak][ai tsak]
隘只 [ai ʧak]

D-3：ɛ-
□个 [ɛ kɔ][ɛ ko]
那个 [ɛ ko]
哀个 [ʔɛ kɤ][ʔE kɯ]
哀𤆬 [ʔE gɐʔ][ʔEɛ kəʔ]
许个 [ɛ kɔ][ɛi ko]

D-4：o-
兀 [o]
□个 [o ˍ]
兀只 [o tsia]
那蜀个 [oŋ ɕi kəi]
哦只 [o tsa]
□蜀个 [oŋ ɕi kəi][oŋ ɕi kɛi]

D-5：e-

哀 [e]

□个 [e ko]

那个 [e ko]

许个 [e ko]

E.「兀」音類

E-1：v-

(口外) [væ][vai]

兀 [vu]

外 [vai]

□只 [va ʧa]

□个 [ve kai]

兀个 [væ][ve kuæ][vəʔ ɣɤ][vəʔ kə][vəʔ kə][vəʔ kɤ][vie][vu kə][vu kə][vu kɯ][vu ko][vu kuo][vu ‐]

兀块 [vəʔ k^huai][vəʔ k^huai][vəʔ xuai][vəʔ xuai]

兀轨 [vu kuei]

外个 [veɪ kəu]

外也 [vɛ iɛ]

未个 [vei kuæ][vei kuæ][vei kuæ]

那只 [va ʧa]

呶个 [vu kɯ]

这槐 [vəʔ xuai]

兀一个 [vei kuæ][vəʔ iɤ][vu i kai]

外一块 [vɛ iɛ]

E-2：u-

□ [uɛ] II

喂 [uei]

(口外) [uɤ][uai]

兀 [u][u][uɛʔ]

□□ [u tsia][ua tsia][u iɛ][uei ie]

□只 [ua tsia]

(口外)个 [uo kr]

□个 [u ‐][u kɛi][u ko]

□介 [uei kai][un kai]

□只 [ua tsia][uɔ tsiɔ][ua tsia]

兀□ [uei iɛ][uɤ iɛ]

兀一 [u iɛ]

兀个 [u ˍ][u kai][u kɤ][u ko][u kuɛ][u kuəʔ][u kuo][u:ɤu][uɔ kɔ][uə kuə][ue kuəʔ][uɛe kuəʔ][uəʔ kuəʔ]

兀也 [uei iɛ]

兀只 [u tsak][u tsia][u ʧa][ua tsia][u tsi tsia][uɒ tsiɒ][ua tsia]

兀呀 [uei ia]

兀块 [u uai][uai uai][uəʔ xuai][uʌʔ xuæ]

兀事 [u xai]

兀槐 [uəʔ xuai]

□ 事 [u hai]

□ 介 [uei kai]

外只 [ua ʧa][ua ʧa]

外块 [uai uai]

位呀 [uei ia]

那个 [u iɛ][u kə][uei iɛ][uei kə][uei kəʔ][uei kuəʔ][uəi kuɛʔ][uo kuo]

委悔 [uei xuɛi]

威个 [ue ˍ]

弯个 [uE kəʔ]

畏个 [ue ko][uei ?][uei go]

伟个 [uei kɤ]

卫个 [uei kəʔ][uəi kɤ]

误个 [u kɤ]

兀一□ [uɤ i uai]

兀一个 [uei kuəʔ]

兀一外 [u iE]

兀一块 [u iE][uei iəə][uei xuai][uo iəə]

□ 蜀只 [ua tsi tsia]

E-3：ʔu-

弯葛 [ʔuE kəʔ]

喂个 [ʔue keʔ]

［地図 III］

A.近称舌歯音類 TS(tɕ/tʃ/tʂ/ts/dʑ/z) - 遠称音類

A-1：TS-N(n/ɳ/l)

[j~l] [j~n] [tɕ~l] [tʃ~n] [tɕ~n] [tɕ~ɳ] [tɕ~ʔl] [tɕ~ʔn] [tʂ~l] [tʂ~n] [ts~l] [ts~n] [ts~ɳ] [z~n] [zh~n]

A-2-1：TS-K(g/k/ŋ)

[tʃ~g] [tɕ~k] [tʂ~k] [ts~k] [ts~ŋ]

A-2-2:TS-H(x/h)

[tʃ~h] [tɕ~x] [tʂ~x] [ts~h] [ts~x]

A-3：TS-U(v/u)

[tʃ~u] [tʃ~v] [tɕ~v] [tʂ~u] [tʂ~v] [ts~u] [ts~v] [z~u]

A-4：TS-その他(∅/TS/P)

[dʑ~m] [tɕ~ɕ] [tɕ~m] [tɕ~o] [tʂ~m] [ts~a] [ts~A] [ts~ɕ]

B.近称舌歯音類 T(t/d) - 遠称音類

B-1：T-N(n/ɳ/l)

[d~n] [t~l] [t~n] [t~ɳ]

B-2-1：T-K(k/ŋ)

[d~k] [t~k] [t~ŋ]

B-3：T-U(u)

[t~u]

B-4：T-その他(∅/T/TS)

[d~e] [d~i] [d~ʔɛ] [d~ʔi] [t~a] [t~i] [t~j] [t~t]

C.近称 N 音類 (n/ɳ/l)- 遠称音類

C-1：N-N(n/ɳ/l)

[l~l] [l~n] [l~ɳ] [n~l] [n~n] [n~ɳ] [ɳ~n]

C-2-1：N-K(k)
[l~k] [n~k] [ɲ~k]

C-2-2:N-H(x/h)
[l~h] [l~x]

C-3：N-U(u)
[l~u] [n~u]

D.近称牙喉音類 K(k/g/h) - 遠称音類
D-1：K-N(n/ɲ/l)
[g~l] [h~n] [k~l] [k~n] [k~ɲ]

D-2-1：K-K(g/k/ŋ)
[g~g] [g~k] [k~g] [k~k] [k~ŋ]

D-2-2:K-H(x/h)
[h~h] [k~h] [k~x]

D-3：K-U(v/u)
[g~ku] [g~u] [g~ʔu] [k~ku] [k~u] [k~v]

D-4：K-その他(∅/T/TS/P)
[g~a] [g~b] [g~e] [g~ɤ] [g~i] [g~p] [g~ʔE] [g~ʔi] [h~b] [h~p] [k~a] [k~b] [k~e] [k~ɛ] [k~ɤ]
[k~i] [k~m] [k~o] [k~p] [k~t] [k~ʔE] [k~ʨ]

E.近称零声母音類∅-遠称音類
E-1：∅-N(n/l)
[a~l] [ɐ~n] [ɛ~n] [i~l] [i~n]

E-2-1：∅-K(k/ŋ)
[A~k] [ɐ~k] [a~ŋ] [ɛ~k] [i~k] [i~ŋ] [o~ŋ]

E-2-2：∅-H(x)
[i~x]

E-3：∅-その他(∅/T/TS/P)

[ɑ~i] [a~m] [a~o] [a~t] [e~m] [i~i] [i~m] [i~o] [i~p] [i~tɕ] [o~t]